



研修を活かした授業実践例

【小学校・中学校編】

教師および生徒の原文を生かして掲載しておりますので、
一部表現のばらつきがありますがご了承ください。



ネパールの子どもたち

香川県高松市立屋島西小学校

担当教科：生活科

木村 尚子

◆実践教科：学活・道徳・生活

◆時間数：3時間

◆対象学年：第1学年

◆対象人数：30名

カリキュラム

◆実践の目的

児童は、週1時間のEタイム(英語)の時間に、歌、リズム遊び、ゲーム、全身を使った活動等を通して、身近な英単語や言いまわしを聞いたり、話したりして、英語圏の文化に少しずつ親しみをもっている。しかし、アジアやアフリカといった地域にはほとんど馴染みがないといってよい。そこで、今回の研修で視察したネパールの学校や子どもたちの様子をを知る活動を通して、まず、世界にはいろいろな生活をしている子どもたちがいるということを気付かせたい。そして、自分たちの生活や家族と比べながら、ネパールの子どもの願いや将来の夢を知ること、共通点や相違点を見つけ、共感したり、尊重したりできる子どもを育てたい。自分の生活とかけ離れることなく、絶えず自分自身や自分の生活などと結びつけ、自分とのかかわりのある学習となるように配慮したい。

ココがすばらしい！

フォトランゲージの手法を使ったり、実際に文化を体験させることで低学年児童の興味を引きつける授業を展開。また、学習参観では保護者も巻き込んだ工夫あふれる授業を実践。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールに行ってきたよ 日本とは違う国があることを知る	①マナバ特別学校の写真を見て、何をしているのか考える ②マナバ特別学校のDVDを見て、自分たちが国語の時間に学習した「大きなかぶ」の劇をしていることを知る ③以上からネパールという国の学校であることを知り、世界地図や地球儀でネパールの位置を確かめる ④ネパールの衣装や国旗・あいさつ等を知る	・マナバ特別学校の写真 ・マナバ特別学校DVD ・世界地図 ・地球儀 ・民族衣装 ・絵はがき ・ネパールの国旗 ・アンモナイトの化石
2	ネパールの学校と子どもたち ネパールの学校の様子と自分たちの学校の様子を比較し、ネパールの子どもの生活に気付いたり、自分の生活に目を向けたりする	①カラバリの学校までの通学写真を見て、どんな所を歩いているのか、どんなものに出会ったのかなどをフォトランゲージにより考える ②カラバリの学校の写真を見て、自分たちの学校と比べ、相違点を話し合う ③ネパールの子どもの好きな食べものや好きな勉強、お手伝い、一番ほしいもの、なりたいたいものを自分と比較しながら聞き、ネパールの学校の様子や生活の一部を知る ④ネパールの子どもと自分を比べて思ったことを話し合う	・カラバリサイト視察の写真(山道・出会った人や山羊や牛、学校、子どもたち、学用品など) ・カラバリサイト視察での質問とその答え
3	ネパールの家族 ネパールの家庭の食事や家族で過ごす時間の様子を知る	・ホームステイした家族を紹介する ・食事の様子を知る ・どんな遊びがあるのかを紹介する ・家族で遊んでいるDVDを見る ・どんな家族かを話し合い、自分が家族と楽しくできることを考える ・自分の家族の願いをさく	・家族の写真 ・食事の写真 ・遊びの写真 ・ホームステイ中のDVD ・ホームステイ先の子どもが遊びに使った石

1 時限目 | ネパールに行ってきたよ

① マナバ特別学校の写真を見て、何をしているのか考える。

研修と一緒に参加した佐々木先生撮影の写真を使って、身近なこととして興味をもたせた。

② マナバ特別学校のDVDを見て、自分たちが国語の時間に学習した「大きなかぶ」の劇をしていることを知る。

青年海外協力隊員の上原さんが、ビデオの中で「うんとこしょ。どっこいしょ。」はネパール語でどういのかを説明してくれたので、子どもたちも一緒にかけ声をかけながら劇を見た。



大きなかぶの劇



お話の場面

③ ネパールという国にある学校であることを知り、世界地図や地球儀でネパールの位置を確かめる。

「このビデオだれが写したん？」という子どものつぶやきから、ネパールに行ってきたことを話し、ネパールの国の位置を世界地図等で確認した。

④ ネパールの衣装や国旗・あいさつ等を知る。

お土産で買ってきたネパールの国旗、民族衣装のクルタヤトピー(帽子)を見せた。やはり、実物に子どもたちは強い関心を示す。また、ヒマラヤの写真から高い山がある国であることを知る。しかし、その山からアンモナイトの化石(ホームステイ先でもらったもの)がとれるということから、昔は海であったことを話す。恐竜が好きな子もいるので意外と関心を示す。現地の学校視察の時使ったネパール語を話したのも子どもたちにはリアリティーがあったようである。以後、「ナマステ」をよく使っている。最後に、写真やビデオを見たり、話を聞いて思ったことやもっと知りたいことをワークシートに書いた。



ヒマラヤとアンモナイト

児童の感想

- ネパールは大昔は海だったことが分かったよ。
- ネパールの女の人の服はかわいいな。
- ネパールの旗の形は日本と違うことが分かったよ。
- ネパールの子どもはどんな服を着るのかな？
- ネパールの子どもはどんな遊びをするのかな？
- ネパールにはどんな動物がいるのかな？

ネパール人になったみたい



- ペットは飼っているのかな？
- 家族は何人いるのかな？
- ネパールにも学校はあるのかな？
- どんな学校なのかな？
- 学校は遠いのかな？
- 数字は何て言うのかな？
- ネパールの町の海は大きいのかな？



きれいな服を着られていいね。



ネパールにとりに行きたいな。

- ネパールの人の車はどんな車かな？
- どんな家に住んでいるのかな？
- ネパールの町にお店はあるのかな？
- どんなものを売っているのかな？
- お米は食べるのかな？
- くだものは食べるのかな？

〈所感〉

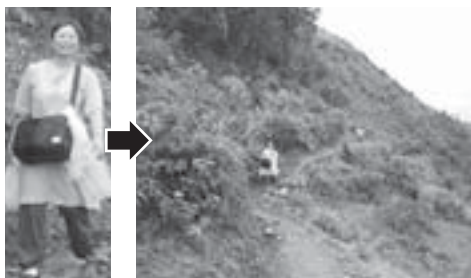
ネパール語の「うんとこしょ。どっこいしょ。」もすぐに覚えてしまい、子どもたちの吸収力の速さにあらためて驚いた。この時期に、いろいろな国の文化や子どもたちの生活の様子を知り、ビュアな心で感じることはとても意味のあることだと感じた。

体験できる学習や子どもたちのもっと知りたいことを取り入れた学習の展開を考えたいと思う。

2時限目 | ネパールの学校と子どもたち

①カラバリの学校までの写真を見て、どんな所を歩いているのか、どんなものに出会ったのかななどをフォトランゲージにより考える。

せんせいは どんな ばしょに
いるのでしょうか？



カラバリサイト視察時の山道

なにと であつたでしょう？



途中で出会った人や山羊

パワーポイントを使い、写真とともにクイズ形式でフォトランゲージを行った。子どもたちからは、森やジャングル、エベレストに登っているなどの答えが返ってきた。全景写真を提示し、どんな道を歩いているのか、何枚かの補助写真を提示した。次に、途中で出会った人を取り上げた。女の人が背負っているものも「野菜」「お米」「草」など様々な答えがあり、中には動物のえさにするという答えもあった。「何と出会ったか」という写真の答えは山羊である。これは、カラバリの学校の子どもたちのお手伝いにある「山羊や牛の世話」につながるものとして取り上げた。

②カラバリの学校の写真を見て、自分たちの学校と比べ、相違点を話し合う。

1時間かけて歩いて、着いたところが学校であることを知らせた後、学校内の写真を提示した。自分たちの学校と比べて見るよう助言し、違うところを話し合った。土足であること、机やいすがつながっていること、カーテンがないこと、女の子がズボンであること、ランドセルがない、電気がないことなどに気付いた。学校という子どもの生活や体験に基づいていることもあるが1年生の洞察力に感心した。

次に、使っているノートや筆箱の写真を提示した。ノートは日本からプレゼントしたものであることや、鉛筆は1か月に1本程度しか使えず、勉強にとっても大切なものであることを説明した。

ネパールの子どもたちと自分を比較し、ネパールの子どもの学校の様子や生活の一部を知る。

カラバリの学校の子どもたちに質問したことと同じことを自分たちも答えながら、ネパールの子どもたちの願いやなりたいのものを知った。



カラバリサイト視察の学校



ノートや筆箱

質問

- ① 好きな食べ物は？
- ② 勉強は好き？
- ③ お手伝いはしますか？
- ④ 一番ほしいものは？
- ⑤ なりたいものは？

③ お手伝いはしますか？

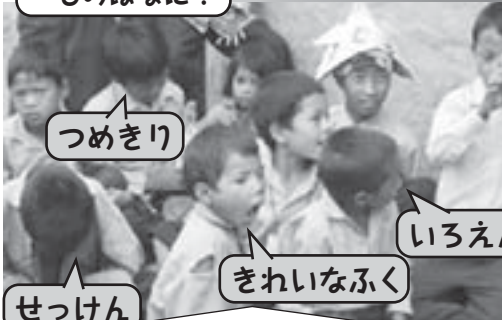


くさかり

やぎやうしのせわ

- 屋島西小の
子どもたち
- ・食器ならべ
 - ・洗濯たたみ
 - ・お料理の手伝い
 - ・お掃除
 - ・しない

④ 一番ほしいものはなに？



つめきり

いろえんぴつ

きれいなふく

せっけん

屋島西小の子どもたち

- ・携帯・ゲームソフト・DS・鉛筆
- ・おもちゃ・ヨーヨー・お金・弟・犬

⑤ なりたいものはなに？



- 屋島西小の
子どもたち
- ・陸上選手
 - ・ベットやさん
 - ・サッカー選手
 - ・野球選手
 - ・看護師さん
 - ・アイドル
 - ・消防士
 - ・宇宙飛行士
 - ・学校の先生

せんせいになりたい！

④ネパールの子どもと自分を比べて思ったことを話し合う。

児童の反応

- いつも1時間歩いているのがすごいなあとと思いました。
- 家で2時間も勉強するのがすごいなあとと思いました。
- 先生になるってすごいなあとと思いました。先生になったらどんな勉強をするのかな。

- お手伝いをいっぱいしているのがすごいなと思いました。
- 鉛筆を送ってあげるといいと思いました。
- 日本にはあるのにネパールにはないものがたくさんあるんだな

学習参観で保護者にも感想をもらおう。

保護者の感想

- ネパールと日本の違いを驚いていました。
- 鉛筆1本を大切に使うって貧しい中でもネパールの子どもたちは生き生きとしているように思えました。自分の子育ての中で見習わないといけないところがたくさんあるなと思いました。
- 学習するために1時間普通に歩いて登校したり、今私たちのまわりではあまり考えられない状況での生活に日本はやはり恵まれ過ぎている国だと思いました。それに感謝する気持ちを失わないように子どもたちと接したいです。
- 手伝いの話がでたときに不思議な顔をして聞いて

いたのが印象に残りました。先生が行ってきた話を聞いてテレビの中の話じゃなく、現実味を少し感じられたように思います。

- まだ狭い世界しか知らない子どもたちにとって他の国の様子を知ることはいいことだと感じました。この授業を通して自分がどんなに物に恵まれた中でのいるのかを認識し、物を大切にする気持ちへとつながってくれたらと思います。また、学べることのありがたさや喜びも感じてくれると嬉しいです。帰宅後、娘ともそんな話をしました。とても興味深い授業でした。

〈所感〉

自分が体で体験して感じたことを大切にしたい。ネパールでいくつか学校視察した中で一番印象深かったのがこのカラバリの学校である。1時間の山道を歩くのは息があがった。大きな石が崩れ落ちていたり、がれきの山があったり。もちろん舗装などされていない山道を雨が降ったときも歩いていけるかと自問した。このような中で、小さな妹をつれて学校に勉強に来ている子どもたちに心を打たれた。この学校の様子や子どもたちの願いをぜひ本校の子どもたちに伝えたいと思った。子どもたちは興味深く写真を見ていたが、写真の連続だったので最後は意識がとぎれてしまった。この1時間で子どもたちに伝えなかったことが伝わるわけではなく、折にふれ、ネパールの話をしていきたいと思う。保護者の方には好評であった。

3時限目 | ネパールの家族

●ホームステイした家族を紹介する

ホームステイ先の家族を紹介するとともに、子どもたちがもっと知りたいこととしてあげた、「ペットは飼っているのか」、「どんな家に住んでいるのか」という点にも少しふれた。子どもたちは、水のタンクを使って、顔を洗ったり、食器を洗ったり、洗濯をしたりすることに驚いていた。

●食事の様子を知る

「どんなものを食べるのか」ということも子どもたちが知りたかったことの一つである。2回しか食事しないことや手を使って食べること、野菜が多いことやたくさん食べてくれることが嬉しいことなどを話した。また、お母さんが料理をしている写真やおやつの写真も一緒に提示した。子どもたちは、ダルバートがどんな味なのかをとっても知りたかった。全部食べると、どうしてまたお皿におかわりをつぐのか、手で食べる理由にも関心を示した。



ホームステイ先の家族

●家族で遊んでいるDVDを見る。

お父さんとボールけりをしている場面や兄弟で腕ずもうやトランプ、お母さんと石を使って遊んでいる場面を見る。

●どんな家族かを話し合い、自分が家族と楽しくできることを考える

子どもたちは、「仲のいい家族なんだな」、「お父さんやお母さん、お姉ちゃんの言うことをよく聞くんだな」、「サンディッシュとお母さんが石で遊んでいたののでしてみたいな」という感想をもった。

●家族の願いを調べ、冬休み大作戦を立てる

自分の家族は、どんな家族になりたいという願いをもっているのかインタビューし、その願いをかなえる作戦を考え、実践するということを発展学習として設定した。
(生活科学習との関連)



食事の様子

〈所感〉

ホームステイ先の17歳の女の子に大切なものは何かと尋ねた。彼女はドクター志望で、いい点で試験に受かるために教育(勉強)が大切だという。お父さんが大切に思っていることは何だと聞くと、「子どもたちを育てて大切にすること、質のいい生活を家族に与えることだ」と答えてくれた。日本においても、親の経済力によって学力差がつくといわれる。親の経済力による教育投資だけに着目するのは問題であり、家庭の教育力としての文化資本にも目を向けてほしいといわれる。市川伸一さん(東大大学院教授)は、「学力に影響を及ぼすのは、どれだけ子どもとコミュニケーションを取っているかとか、親のもつ価値観です。親としっかり話をする子は、筋道立てて話ができる国語力が身につく。親が新聞も本も読まず、博物館や美術館にも行かなければ、文化的な関心や教養は育たない。」と語っている。ホームステイ先では、親子や兄弟間でしっかりコミュニケーションが取れていた。これは、感心したことの一つである。生活科の学習とも関連させ、家族の一員として自分ができることを考えたり、家族と一緒にお手伝いをしたり、楽しい時間をもったりする中で、少しでも親子間や家族間のコミュニケーションを取ってほしいという願いから、この時間の学習を設定した。

成果と課題

一般に行われている英語による国際理解だけでなく、英語圏ではない国を知るための授業も大切な国際理解であると実践を通して感じた。これまで、国語等で世界の子どもたちの様子を学習することがあったが、本の中に書かれていることを調べる学習で終わっていた。しかし、自分自身が体験し、感じたことを教材化すると教材を通して伝えたいねらいができ、子どもたちがどんな点に興味・関心をもっているのか把握しながら学習を展開することができた。そして、低学年の時期でも身近なことから興味をもち、世界の国々に目を向けることが大切であると実感した。1月に、国語の「じゃんけん」という教材で、インドネシアのじゃんけんが取り上げられている。今まではこの学習の後に自分のオリジナルじゃんけんをつくっていたが、今回は世界のいろいろなじゃんけんを調べる活動を設定したいと考えている。この学習活動を通して、ネパール以外の国の子どもたちの遊びから世界の国に関心をもたせたい。

対象が1年生ということで、「ネパール」という国を通して、日本以外の国を知る楽しさや興味をもつことを主眼においた授業構成になった。実践報告までに授業実践できなかったが、6年生を対象に青年海外協力隊に視点をあて、ネパールの学校現場における協力隊員の活躍を伝えたいと思う。加えて、その国が直面している問題点や日本との関係も合わせて学ぶことができれば、さらに国際理解が深まると考える。



参考資料

【書籍】

- ・地球の歩き方編集室（2007）「地球の歩き方ネパール2007～2008」ダイヤモンド・ビッグ社



ネパールを身近に～そこから始まる国際理解～

香川県さぬき市立津田小学校

担当教科：全教科

佐々木 広子

◆実践教科：学活 ◆時間数：5時間 ◆対象生徒・学年：小学4年生 ◆対象人数：39名

カリキュラム

◆実践の目的

児童は、総合的な学習の時間にアメリカ・中国・カナダ等の国々の様子について学んだ経験はあるが、ネパールについての学習は初めてである。本実践では、ネパールの生活の様子とともに子どもたちはどんな勉強をしているのかを学ぶ場を多く設定する。日本から遠い国に住んでいても自分たちと同じ学習内容を勉強したり、新しいことに興味をもって目を輝かせたりしている様子を知ることによって、ネパールの子もたちと日本の子もたちの類似点を見つけ、身近に感じる必要があると考える。そして、自分たちの仲間としてネパールの子もたちを自然に受け入れる気持ちをもち、世界中のみんなが幸せになれるための活動をするとは、人として当たり前のこととして捉えられる児童の心を育むことをねらいとする。

また、保護者にもネパールについて知ってもらい、学校と家庭の連携が図れるよう、実践授業の一部を参観日に実施する。なかよし週間(校内人権週間)に位置付けることで、世界のどこに住んでいても、どのような環境であっても、人は一生懸命生きていることを子どもたちとともに感じてもらう共感できる場を設定する。そして、授業はオープンエンドの形態をとり、児童の興味や関心が続くようにする。

ココがすばらしい!

導入では民族衣装を着用し、子どもたちの興味を引きつける工夫をした。ネパールとの共通点を探したり、子どもたちの質問をまとめ、ネパールの人に手紙を書くなどの取り組みによりネパールが身近になっている。

授業の構成

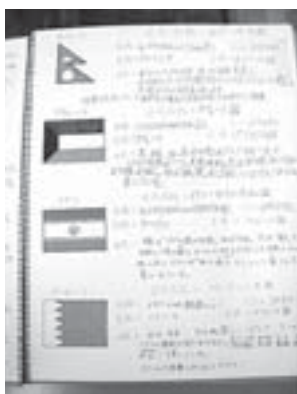
時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ナマステ ネパール 日本だけでなく世界には多くの国々が存在していることに気付く	①地球儀でネパールの位置を探す ②ネパールの国旗を探す ③「ナマステ」のあいさつについて知る ④ネパールの学校で使用する掛け図(文字、生き物、植物、歴史上の人々等)を見て、日本と違うところや似ているところを見つける	・図鑑 ・地図帳 ・地球儀 ・世界地図
2	写真合わせ 先入観や固定観念などに気付く、ものごとの一部だけを見て、判断をくだすことの危険性を知る	①グループを作る(4～5人) ②1枚を2分割した写真を想像しながら完成させる ③分割された写真を持っているグループを捜す ④想像した写真と実際の写真を比較し、感想を言う	・1枚を2分割した写真のコピー(食べ物に祈るインドの人・ウガンダの少年兵・赤ん坊を抱くイスラムの男性・地雷回避教育を受けるアンゴラの子ども・ブータンの民族衣装)
3	ネパールのひみつpart1 ネパールの国の文化や価値観について想像し、ネパールについて関心をもつ	①ネパールの通りの写真で隠されているものを想像し、日本との相違点を知る ②ネパールの学校で何をしているか想像し、日本との類似点を知る ③ネパールの子もたちの表情と自分たちの表情を比べて感想を発表する	・ネパール国旗 ・ネパールの写真(衣食住関係・学校関係・宗教関係等) ・民族衣装(クルタ)

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
4	ネパールのひみつpart2 ネパールの学校の様子や勉強の内容を知ることによって、日本との相違点や類似点を見つける	①ネパールの音楽を聞く ②ネパールの算数教科書の問題を解き、日本と比べる ③ネパールの国語の教科書をみて感想を言う ④ナマステ体操をする ⑤ネパールの勉強についての感想を書く	・ネパールの音楽 ・ネパールの写真 （衣食住関係・学校関係・宗教関係等） ・ネパールの教科書 （国語・算数） ・ナマステ体操DVD
5	ネパールへの質問 ネパールについての質問をまとめ手紙に書く	①ネパールの写真や実物を見ながら話を聞く ②これまでの学習を振りもって知りたいことを手紙に書く	・生活用品（お金・おもちゃ） ・ネパール人が書いた手紙 （日本語とネパール語） ・前時までの資料すべて

授業の詳細

1 時限目 | ナマステ ネパール

外国についての知識が少なく、ネパールについては全く聞いたことさえない児童に、これから始まろうとする学びについて興味をもたせる必要がある。そのために、ネパールのあいさつや自己紹介の言葉、学校用の掛け図等を掲示することによって、これからの学びに期待できるような導入を行った。



ネパールの国旗はよくわかるよ
だって形が違っていいよ



ちょっとはずかしい「ナマステ」って

児童の感想

- ・ネパールは日本の北海道くらい大きさなので小さいと思った。
- ・エベレストがあるのはネパールだと初めて知った。
- ・ネパールには海がないから、海水浴ができないので日本にいてよかった。
- ・日本にはいろいろなあいさつの言葉があるけれど、ネパールはどんなときも「ナマステ」なのにはびっくりした。
- ・文字の上下が分からなくてむずかしいので読めない。また、どのようにして書くのか書き順を知りたい。
- ・日本でも咲いている同じ花があるし、同じ動物もいることが分かった。

〈所感〉

4年生という発達段階の子どもたちは、「ナマステ」の仕方を喜んで真似る者と恥ずかしがって自分ではなかなか真似ることのできない者がいる。しかし、両者ともに「ネパール」という国についてこれから学んでいくという期待感をもてた。子どもたちのなかに世界には「ネパール」という国があると意識付けられた。

2時限目 写真合わせ

世界の国々はそれぞれ独自の文化をもち、生活様式や国内の情勢も日本とは異なっている面をもっていることを知ることは、児童にとって有意義なことである。そこで、写真の断片から想像して写真を完成させることによって、異文化を体験できる場を設定した。

児童の感想

- ・ みんなが想ぞうした絵は似ていたり、違っていたりした。イメージと全然ちがうのにはびっくりした。
- ・ 初めはかんたんだなと思って想ぞうしてかいていたが、他のチームが気になった。時間がきていよいよ答えが分かると思うとドキドキした。でも、答えを見て「あれ？どうして？ええ？」と思った。想ぞうととてもちがっていたのでびっくりした。
- ・ 子どもなのにじゅうを持って大人といっしょにいたので、とてもびっくりした。ぼくたちと同じくらいの年なのに、兵隊になっているのだなあとと思った。
- ・ ぼくは、赤ちゃんをだいているのはお母さんだと思っていたけれど、男の人がだいていたのでびっくりした。想ぞうしてかくのもおもしろいなあとと思った。
- ・ 私が想ぞうしたのと全然ちがうのでとてもびっくりした。だけど、いろいろな想ぞうができたのでよかった。
- ・ 今感じていることは、予想外だったことだ。男の人が赤ちゃんをだいていたり、スカートをはいていたりしていた。この世の中にはいろいろな人がいるんだなあとと思った。
- ・ 子どもがせんそうの勉強をしたり、じゅうを持ったり、男の人が赤ちゃんのかん病したりとありえないような写真だったのでまたしたい。
- ・ 見ていないのかくのはむずかしかった。日本のことならもっとわかった。



スカートをはいているのは女の人で・・・



予想と全然違ってびっくり

〈所感〉

児童にとっては初めてのフォトランゲージだったので、楽しんで意欲的な取り組みが見られた。

自分たちの想像とは全く違った写真からうけた衝撃はかなり大きなものであったことが感想から読みとれる。終了後に掲示した写真は上級生や保護者が興味深く見ていた。

ここでは、世界では日本と違うことがたくさんあることに気付かせられたことで児童の世界をみる目が徐々に広がりつつあることを感じた。

また、6年生42名にも6年生の学級担任が同様の学習を実施した。そちらでも大変興味深い学びがあったと報告を受け、開発教育を系統的に進めていくことの必要性を感じた。

3時限目 | ネパールのひみつ part 1

本格的にネパールの学習をするに当たって、民族衣装クルタで授業に望み、臨場感を伝えるようにした。

また、ネパールの子どもたちの授業内容の類似点を見つけさせることにより、遠い国ネパールを身近に感じよう場面設定をした。そして、文化や生活様式の相違点はあっても、ネパールの子どもたちも日本の子どもたちと同じ様に一生懸命に学ぼうとしている表情を共感的に捉えられるようにした。

児童の感想

通りの牛について

- ・日本なら大さわぎになるけれど、ネパールでは神様の使いだと思われているところがちがう。
- ・私だったら、牛がいたらにげだしているのに、牛を大事にしているのがすごい。
- ・道に牛がふつうに歩いているなんて日本なら考えられない。
- ・ネパールの人は牛がいても変だと思わないし、おこらないのにびっくりした。
- ・日本なら道に牛がいたら大ニュースになる。
- ・日本ではへびが神様の使いと聞いたことがあるけれど、ネパールは牛だと知った。
- ・ぼくは牛が道を歩いているなんて思いもしなかったけれど、お母さんは「牛じゃないかな」と言っていたのでふしぎだった。



えっ、なんでこんなところに牛が・・・

大きなかぶの劇について

- ・わたしも学校で劇をしたなあと思い出した。
- ・ネパールの人でも「大きなかぶ」を知っているなんてびっくりした。
- ・ネパールでも劇をしているのが同じだし、大きなかぶとは思わなかった。

ネパールの子どもたちと自分たちの表情

- ・ネパールの子どもたちはとてもうれしそう。でも、自分たちは真剣な様子だ。
- ・ネパールの子どもたちはニコニコ笑っていて楽しそう。
- ・自分もネパールの子どもたちみたいに笑ってみたい。



ネパールの子どもたちの表情



大きなかぶの劇

〈所感〉

児童は保護者が参観していることで緊張していたが、民族衣装で授業に臨むことで授業への期待が高まった。授業のねらいであった文化や生活様式の相違点はあっても「ネパールを身近に感じる」について、「大きなかぶの劇」の写真提示によって達成できたと思われる。そして、ネパールの子どもたちの明るい表情と自分たちの真剣な表情を比べることによって、どちらの国の子どもたちも一生懸命学校で学ぼうとしていることを感じられたようだ。

このような効果を得るために効果的であったのは、フォトランゲージである。児童の興味や関心を引き出すために、あえて写真の一部分を隠しておくことによって想像力を働かせなければならない場面を設定したことは、児童が学びの必然性を感じる場面であった。



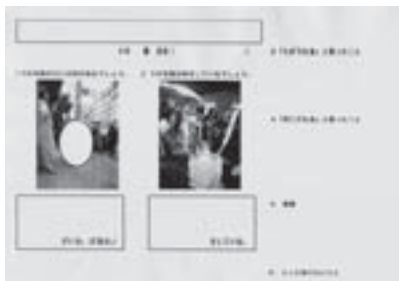
ネパールの民族衣装を着て

知識を与える前に児童の知りたいという感情を高めることによって学びの価値は高まることが感じられた。また、写真をすべて見せながら、自分たちの生活と結びついていることを知らせるだけで、意欲をかきたてることができた。

この授業は、クラスの保護者の約8割が参観した。授業内容をすべて参観できない保護者のために授業に関する資料を別のスペースに掲示しておいた。そうすることにより、授業後の子どもとの感想の交流で大きな差がでないようにした。保護者は興味深く掲示を見ていた。



この写真は何だろう



保護者とともに

4時限目 | ネパールのひみつ part3

3時限目の児童の感想から、ネパールの子どもたちの生活を知りたいという希望が多かったので、ネパールの4年生における教科内容についての学習を設定した。

導入にネパール音楽を取り入れ、国語と算数はネパールの実物の教科書、体育についてはJICAシニア海外ボランティアの酒井直之氏が考案したナマステ体操のDVDを使用し、児童の興味や関心を高めた。

児童の感想

算数の教科書のわり算

- ・筆算の問題は同じだけれど、とき方がちがう。
- ・わたしたちはかん単なのに、なんでこんなに大変な仕方をしているかふしぎ。
- ・日本と同じ数字を使っていることがわかった。でも、4年生の教科書に数字の書き順があるので、1年生の教科書も見たいし、中学生の問題もあったのですごい。
- ・ネパールの子どもたちは、わたしたちとちがう方法で勉強していた。わたしは分からなかったけれど、ネパールの子どもたちはわたしたちの方法がわかるのかなと思った。わたしも負けずに勉強したい。
- ・このわり算の仕方は時間がかかりそうだし、つかれる。でも楽しそう。やってみたい。
- ・日本の筆算の仕方をわたしが教えてあげたい。
- ・国によって計算の仕方がちがうんだなあと思った。

国語の教科書

- ・ああ、暗号がならんでいるとしか見えない。わからない。
- ・ぜんぜん読めない。日本の国語はたて書きだけれどネパールは横書きなのがちがっている。
- ・わたしはぜんぜん読めないけれど、ネパールの子どもたちは日本語が読めるのかなと思った。
- ・教科書は白黒いんさつで色がいないし、絵も少ない。
- ・字は読めないけれど、さし絵からわたしたちが国語で習った「ヤモ」の話かもしれないと想ぞうした。
- ・字が読めないから、ネパールへ行ったら困ると思った。



わり算の筆算を習っている



休憩時間に友だちとへえ

児童の感想

ナマステ体操

- ・ヨガや日本のラジオ体操がまじっておもしろかった。
- ・運動場がないのでせまいところでも、できるのかなと思った。
- ・長い体操だったけどおもしろかった。
- ・日本人が作った体操とはすごい。それも香川県の人とはびっくり。
- ・日本の弓矢のポーズがあったのでびっくり。全部したら長くてけっこうつかれた。
- ・日本のラジオ体操よりおもしろい。



楽しいけどつかれる・・・



ヤギがいるし運動場がない

〈所感〉

授業の始めにネパールの音楽を流し、ネパールの4年生の教科書を使うことで、児童はネパールとの相違点を感じながらも興味津々であった。

ネパール音楽をバックミュージックにしようと提案すると、「なんだか、いい感じや」と雰囲気を楽しんだ。

また、算数のわり算の計算方法はネパールが大変だと分かり、日本の方法を教えてあげたいという感想から、言葉が通じなくても算数なら同じ数字を使っているので可能であると考えた児童の素直な気持ちが出ていた。言葉の通じないネパールの子どもが身近にいれば今回の体験が活かせるのではないかと考えた。

5時限目 | ネパールへの質問

授業を進めていくなかで児童の興味や関心は次々とわいてくる。そのため、ネパール人でなければ答えられないような疑問もでてきた。そこで、ホームステイ先の家族のひとりが日本に留学していることを知らせ、質問がある場合には手紙を書けばよいことを知らせた。

児童の感想

- ・ネパールの遊びをしたい
- ・ネパールのおいしいものを食べたい
- ・ネパールにいる動物に会いたい
- ・一度ネパール人に会いたい



会ってみたい

〈所感〉

実際にネパールの人が書いた日本語の手紙を読んだり、ネパール語に訳した手紙を見たり、ネパールの人に質問ができてきたりすることで、児童にとってのネパールはより身近な存在となったと感じる。

そして、「やっぱりネパールは日本と違う」という児童の素直な感想を読んだとき、児童は日本のよさも感じていることにほっとした。

成果と課題

私はクラスの児童に、人の幸せを一面的な豊かさだけからみないでほしいと願っている。豊かさを生活の利便性や生活に関する物質の多さを挙げるだけでなく、別の観点からも豊かさを感じて欲しいと願う人間のひとりである。

東京書籍出版の小学4年生の国語の教科書に「世界一美しいぼくの村」という教材文が掲載されている。主人公「ヤモ」が住む自然豊かなアフガニスタンの村が戦争でなくなってしまう内容である。9月教材であったので、ネパールから帰国して授業をしながらクラスの児童はどう考えているのだろうと思っていた。そんなとき、児童のひとりが感想で「こんなに美しい自然豊かなアフガニスタンにいるヤモは幸せだ」と記した。この児童にはネパールにある豊かさを感じることができると直感すると同時に、この感性を大切に育んでいくことがわたしたち大人の責務であると決意を新たにした。

成果

①児童にとって

- ・身近にネパールへ行った教師やネパール人がいることで、世界の国々に興味をもつきっかけができた。
- ・児童は全く未知の国であったネパールの文化や生活様式の一部を知る活動を通して、日本の生活や文化を見つめ直すことができた。そして、ネパールとの相違点を感じながらもネパールを身近に感じるようになった。
- ・算数のわり算を簡単にできる日本の教育内容のレベルの高さを感じることで、自分の学んでいることに誇りをもつことができた。また、ネパールの子どもたちに教えたいと考えられるようになった。
- ・参観授業を実施したことによって、保護者と学習内容の共有ができ、家族とより深くネパールについて話し合うことができた。

②教師にとって

- ・研修に参加することによって、日本の教育システムや内容を客観的に分析するきっかけ作りができた。
- ・自分自身の手で国際理解教育(開発教育)の教材開発をすることによって、教材分析の視点が明確になるとともに手法の幅が広がった。
- ・校内の研修で全教職員にネパールについての現状を伝える機会をもつことができ、JICAの教師海外研修の内容やシステムを伝えることができた。
- ・保護者からの授業に関する質問や感想を寄せられることによって、保護者の期待に答えることができた。

課題

- ・国際理解教育(開発教育)のための多様な教材が開発されるとともに、系統的な指導計画が必要であると感じた。そのためには、国際理解教育(開発教育)に興味や関心をもつ教師を核として、継続的な取り組みをしていかなければならない。
- ・総合的な学習の時間が縮減されるとともに、5・6年生で英語授業が実施されるため、国際理解教育(開発教育)の位置付けとともに実施時間の確保に制限を受けやすくなる。

参考資料

【書籍】

- ・「ユニセフの開発のための教育～地球市民を育てるための実践ガイドブック～」(財)日本ユニセフ協会発行

【映像】

- ・JICAシニア海外ボランティア 平成15年度派遣 酒井直之制作 DVD「ナマステ体操」



ネパール料理から世界を知ろう！

愛媛県松山東雲中学・高等学校

担当教科：家庭科

木下 かおり

◆実践教科：技術家庭 ◆時間数：9時間 ◆対象生徒・学年：中学2年生 ◆対象人数：37名

カリキュラム

◆実践の目的

- ネパール料理を通して、食材や調理の特徴、マナーを知り異文化理解を深める。
- 日本の暮らしと比較させ、それぞれの文化の良さ・課題に気づく視点を身に付けさせる。
- グループ内での意見交換を通して、いろんな見方・考え方に気づき、互いに認め合う態度を育てる。
- 自分のもつ力を社会に活かされることを知り、社会の一員であることを自覚させる。

ココがすばらしい！

「手食」に注目し、実際に体験する事で生徒に異文化を考える機会を提供した。また、ネパールの「良いところ」に注目する授業を展開し、それぞれの違いを認め合う大切さを伝えた。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 ・ 2	ナマステ！ネパール生活 ・ネパールに対して興味をもつきっかけにする ・フォトランゲージの方法や視点を知る ・フォトランゲージを通してネパールの衣食住を知る	①世界地図でネパールの場所を確認する ②アンケートからネパールのイメージを発表する(事前にアンケートを実施) ③フォトランゲージの方法、視点、態度面での注意事項の確認。 ④班ごとにフォトランゲージを行う ⑤写真のタイトル、感じたことを発表する ⑥授業を振り返り、感想を書く	・アンケート用紙 ・説明用のP.P※資料A ・フォトランゲージ用の写真(6枚)※資料B ・付箋紙、色画用紙、ペン
3	世界の食事のマナーとは？ ・各国のマナーの大切さを知り、料理に適していることに気づかせる	①どんな食べ方があるか答えさせる ②世界の主な食法について説明する ③手食のマナーについてのクイズを出す	・説明用のP.P※資料C ・ネパール料理から世界を知ろうプリント ※資料D-①,②
4	ネパールの食習慣を知ろう ・材料、調理法、マナーなどの違いを知り、異文化への関心を高める	①材料・作り方の説明 ②手で食べるとどうなるか考えさせる	・ネパール料理の写真 ・ネパール料理から世界を知ろうプリント ※資料D-③,④
5 ・ 6	ネパール料理を作ろう ・実習を通して調理方法、食べ方などを体験する	①材料・手順の確認 ②グループごとに実習を行う ③手で試食する	
7	手食体験からの発見 ・体験を通して手食の役割を知る	①手で試食してみでの意見交換をグループに分かれて行う ②グループごとに発表する	・手食からの発見(プリント)※資料E
8	食材からわかること ・食材に興味をもたせる ・食材と食作法との関係を理解する。	①食材を配布し観察する。 ②それぞれの形、色などの特徴の違いから、食べ方とのつながりを考える	・食材(精白米、タイ米、ベトンライス)
9	ネパールから学んだこと・わたしができること ・自分のこれからの可能性を知る。	①ネパールと日本の暮らしを比較しながら、良い点・改善点を考えさせる。 ②青年海外協力隊の活動を紹介し、自分たちができることを考える	・ネパール料理から世界を知ろうプリント ※資料D-④ ・青年海外協力隊クイズにチャレンジプリント

1・2時限目 ナマステ！ネパール生活

1. 事前に実施した、ネパールについてのアンケートの結果発表を行う。
2. パワーポイントを使用し、フォトランゲージの説明、練習を行う。
3. 6つのグループに分かれ、フォトランゲージを実施する。
4. グループごとに写真のタイトルを発表させる。
5. 感想を書く。



フォトランゲージの様子



授業の様子



発表の様子

アンケートを通して一部の生徒以外は、ネパールの気候や生活についてほとんど知らないことがわかった。また、ネパールに対するイメージは「治安が悪そう」、「きたなそう」、「貧しそう」などマイナスイメージを持つ生徒が多かった。そのため、フォトランゲージ用のプリントに「ネパールの生活の良さは何だろう…？」という枠をつくり、写真から想像できる良さを考えさせるようにした。

まず、パワーポイントを使ってフォトランゲージの説明、練習を行い、2時限目にグループごとに実践させた。各グループごとに多くの意見が出て、活発に活動ができた。

感想文の中で、ネパールの生活についての内容以外に、「一枚の写真から、クラスメイトの想像力の豊かさ観察力に驚いた。いろんな意見が出ておもしろかった。」というものがあつた。普段、見ることのない友だちの一面を発見できた生徒もいたようである。

生徒の反応

フォトランゲージの結果抜粋



- ・ネパールでの生活の良さは何だろう？（写真から想像できること）
 - ①お手伝いをして協力し合っている。家族が多い。
 - ②型にとらわれていない自由な生活をしている。衣服の色、家の外観などから。
必死に生きている姿が写真から伝わってきている。
 - ③自然が多く、土地が広大。

生徒の感想

- ・「ネパール」と聞くと貧乏というイメージしかなかったけれど、今日の授業でイメージが少し変わりました。将来の夢に、医者・学校の先生・警察官など人の役に立てる仕事がしたいというのは、自分の国のことをちゃんと考えているんだなと思いました。
- ・ネパールでは生活に格差はあるけれど、私たちとは全く違うというわけでもなかったの、とても親近感がわきました。ネパールの子どもたちからみた私たちは、どのようなイメージなのか気になりました。
- ・ネパールは自由に生きていけそうな気がした。
- ・写真を見ただけで、たくさんのことがわかるのがスゴイと思った。各グループのフォトタイトルもおもしろかったし、発見したこと感じたことなど納得できた。また、フォトランゲージをしてみたい。
- ・また、こういう他国について知る機会があれば、積極的に参加して、様々なことを身に付けたいと思った。
- ・洗濯機とか冷蔵庫がないけれど、意外とやっつけられることに驚いた。また、写真からネパールの人たちは温かそうだった。日本は豊かな国っていうけれど、そういう意味ではどこの国よりも貧乏な国かもしれない。
- ・みんなで意見を出し合い考えたのは、とても楽しかったし、面白かった。視点を変えると今まで見えなかったものが見えてくるのがわかった。私もネパールへ行ってみたい。

〈所感〉

自分が気づかなかったネパールの良さを生徒が発見しており、フォトランゲージのおもしろさを再発見することができた。想像することを書き出すことで、実際はどうかという質問が出たときに、自分が知っていることには限りがあり、生徒の知る欲求を満たすことができなかったことが残念だった。しかし、良いところを見つける視点を意識させることで、始めもっていた「日本よりも良くない国」というイメージは偏っていたと気づいた生徒もあり、視点を育むことができたように思う。

3時限目 世界の食事のマナーとは？

1. プリントに、どのような食べ方があるか、自由に書かせる。食べ方にあった料理は何かも考えさせる。
2. なぜ様々な食べ方があるのか考える。
3. 世界の食事法(箸食、手食、ナイフ・フォーク・スプーン食)の区分を、世界地図に書き入れる。
4. それぞれの食事法には機能、特徴があり目的にあっていることを確認させる。
5. 手食のマナークイズを行い、次の調理実習の実践へとつなげる。

生徒の反応

手食文化圏の人口がもっとも多いことに驚いていた。自分たちも良く手で食べていることを知り、「手食」文化を身近に感じることができていたようである。

「手食」＝「貧困」と考えている生徒もいたが、食べ方を再確認することで、機能や食材によって文化が異なるということが理解できていた。

〈所感・改善策〉

なぜ、いろんな食べ方があるか考えさせたとき、意見が出にくかった。具体的に料理を見せて、自分ならどのように食べるか質問する形にしたら、もっとわかりやすくなったと思う。

4時限目 ネパールの食習慣を知ろう

1. ネパール料理(ダルバード)の材料・作り方の説明をする。
2. グループに分かれ、手順の確認、役割分担をさせる。
3. 手で食べるとどうなるか、予想をたてさせる。

生徒の反応

手食のイメージ(プリントから抜粋)

・素手で食べるのは汚そう ・食べにくそう ・食べ方が予測つかない ・楽そうだけど手が汚れそう

〈所感〉

ご飯を「手で食べる」ということに対して、手を洗うとわかっていても、「不衛生」という考えをもつ生徒が多かった。口に入れてしまう食べ物であっても、手につくことへの抵抗感があるのは、豊かな日本だからこそだと感じた。

5・6時限目 ネパール料理に挑戦！ダルバードを作ろう！

1. 調理手順、手食マナーの確認をする。
2. グループごとに実習させる。
3. 完成したグループから、意見交換しながら試食させる。

生徒の様子

「手を使う」ことへの抵抗があるため、なかなかダルバードに手をつけられない生徒がいた。しかし、逆に手食を気に入って最後までスプーンを使わず完食する生徒もいた



実習の様子

手食の感想

- ・手につく感覚があった。いつもスプーンで食べているから少しとまどった。
- ・「グチョッ」て感じだった。
- ・親指に決まった動きがあってびっくりした。
- ・最初食べにくかったけど、教わった食べ方で食べると、驚くほど食べやすくて少し感動しました。
- ・ナス嫌いだったのが食べられるようになった。
- ・日本の米よりタイ米の方が粘りが少なく、手で食べやすかった。
- ・これが、ネパールでは普通なんだから、すごいと思った。



〈所感〉

手食のコツは実際に近くでして見せないと伝わりにくく、もう少し時間をかけて説明する必要がある。精白米とタイ米を半分ずつ試食させることで、食材と食べ方の関係を考えさせることができた。

調味料の調整については、もっと研究が必要であった。また、食事をするときに良く使うネパール語を教えておけば、もっとネパールを感じることができる実習になると思った。



7時限目 手食体験からの発見

1. グループごとに以下のテーマについて考えさせる。
(ネパールではなぜ手で食べるの？手食の良さは？手食で困ることは？手食を通して発見したことは？)
2. グループごとに発表する。

生徒の意見

①なぜ手で食べるの？

- ・食べやすいから。
- ・手で食べるのが好きだから。
- ・手で食べる文化がそのまま残っているから。
- ・おいしさも食欲も2倍になり、たくさん食べられるから。

②手食の良さは？

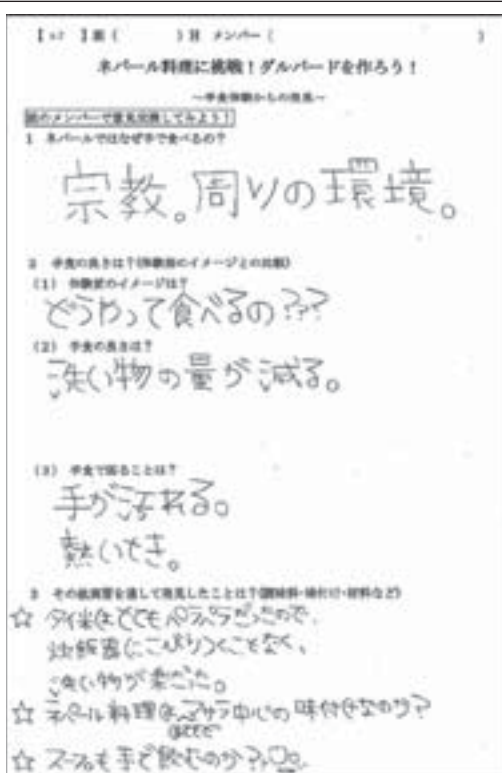
- ・子どもでも自分で食べられる。
- ・洗い物が減る。
- ・手を洗う習慣、爪を切る習慣がつきそう。
- ・食器のぶつかる音がしない。
- ・豪快に食べられる。
- ・最後の最後まできれいに食べられる。
- ・手をまめに洗うので清潔そう。
- ・温度がわかるので、口をやけどしない。

③手食で困ることは？

- ・熱いものが食べられない。
- ・手が汚れる。
- ・口の周りが汚れる。

④手食を通して発見したことは？

- ・タイ米はとてもバラバラだったので、炊飯器にこびりつくことなく、洗い物が楽だった
- ・スプーンよりも手の方が混ぜやすかった。



〈所感〉

5・6時限目の調理実習から、松山市在住のネパール人サラさんに授業に参加してもらうことができた。実習のまとめの部分では、生徒から出てきた疑問点について答えてもらうことができ、より充実した授業になった。実際に手食を体験することで、体験前には気づかなかった良さを発見させることができた。

8時限目 食材からわかること

1. 精白米・タイ米・ベトンライスの実物を配布する。
2. ノートに貼付させ、それぞれの形、色などを観察させる。
3. 食材と食作法との関係を考えさせる。

生徒の反応・所感

日本にも地域の特産物があるのと同じように、国によってもその土地の環境によって食べ物が異なることを確認させた。また、さまざまな料理があふれている日本は、自給率が低く輸入に頼っていることにも気づいた生徒もいた。郷土料理から、現地の生活を調べさせ、食べ物と生活習慣のつながりを学ぶことも、今後実践してみたいと思った。

9時限目 | ネパールから学んだこと・わたしができること

1. 衣食住、家族について、日本とネパールの暮らしを比較させる。
2. グループでそれぞれの国の良い点・改善点をみつけ、自分がこれからできることを探す。
3. 青年海外協力隊のクイズをする。(ネパールで出会った協力隊の紹介もする。)
4. 自分にもできそうな仕事、やってみたい仕事を考えさせる。

生徒の意見

～自分がこれからできること～

- | | | |
|-----------------|--------------------|------------------|
| ・無駄なものは買わない。 | ・自然を大切に作る。 | ・自分の生活にあった家庭を築く。 |
| ・ものを大切に作る。 | ・緑化活動をする。 | ・募金をする。 |
| ・わがままを言わない。 | ・家族との時間を今よりも大切に作る。 | ・服などを寄付する。 |
| ・できるだけ食事は手作りする。 | ・ストレスをためないようにする。 | |

〈所感〉

様々な意見が出せるようになった。日本での生活の良いところ、改善点をグループで話し合わせることで、それぞれの国の良さを認める姿勢が生まれた。そして、現在の自分の生活をより良くするために、これから自分ができることを考えさせることができた。ネパールの良さを日本で実践するために、ものや自然を大切にすることや、我慢をすることなど自分自身の生活に対する内部的な意見と、募金やボランティアをするという外部的な意見が出た。

協力隊については、自分が今もっている能力を他国で活かすことのできる可能性に驚いているようだった。身近な習い事や趣味であっても、その技術を求めている国があるということは、生徒たちにとって大きな発見になっていた。

成果と課題

生徒たちは、普段と異なる授業スタイルにより、いつもより興味をもって取り組んでくれた。様々な視点をもつこと、他人の意見を尊重することなど、授業実践の目的は、ほぼ果たすことができた。生徒主体の授業を行うことができ、意見を発言することの楽しさ、他人の意見を知るおもしろさもクラス全体で感じる事ができた。

ネパールという国を具体的に授業に取り入れることで、他の国への関心も生まれている。身近なこととして考えさせるのに、教科書やネット上の情報よりも、自分の体験の方が効果があった。

しかし、自分の体験には限界があり、生徒の知る欲求に全て応えられなかった。また、自分の伝えることが、生徒にとって全てになってしまわないように注意することも必要だった。今後の授業でも気をつけていきたい。

私自身としては、実践授業を通して授業の幅が広がった。中学2年生以外にも食分野を学んでいる高校2年生、3年生の授業にも一部取り入れることができ、いろんな視点から家庭科を教えることができた。

中学生全体の前で話す機会、文化祭での展示発表などで研修報告を実施したが、もっと整理して丁寧に伝えなかったという思いがある。実践を重ね、授業内容に発展させていきたい。

国際理解教育については、まだまだ自分自身が勉強不足である。今回の授業実践では、生徒たちに他国と日本との距離を縮めさせることはできたと思う。他国とどのように関係を築いていくかは、これからの大きな課題である。

自分1人で授業をつくっていくのではなく、この研修によって生まれた人とのつながりを活かして、新しい授業にチャレンジしていきたい。

参考資料

【書籍】

- ・地球の歩き方編集室(2007)「地球の歩き方 ネパール 2007～2008」ダイヤモンド・ビッグ社
- ・JICA中国「世界から教室へメッセージ―国際理解に役立つ教材集」独立行政法人国際協力機構中国国際センター
- ・JICA四国「授業に役立つ 国際理解教育実践報告書 JICA四国 平成19年度 教師海外研修」
- ・研修中配布資料

資料 A



生徒へ：

今日から約4週間にわたって、ネパールの生活を知ることで異文化について学んでいきます。始めに理解してほしいことは、私が今後話す内容は、私がこの夏ネパールに短期滞在した間に感じたことです。人によって見方・考え方は異なるので、私が話すこと＝ネパールの全てと思わないでください。実際に暮らしてみないとわからないことが沢山あるということを覚えておいてください。



ネパールの宗教は主にヒンドゥー教です。牛は神聖な生き物とされており、大切にされています。歩道を歩いていたり、道路に堂々と座っている姿は時々みられました。牛をはねると、人をひいた時と同じ罪になります。問題点としては、食することができないため、飼うことができなくなったら捨てられて“のら牛”になる場合も多いそうです。





フォトランゲージとは？

- 写真を通して、ネパール生活を知ろう！

方法

- ① 目で見てわかることは？
- ② 思うこと、想像すること、疑問に思うことは？
- ③ 写真にタイトルをつける。

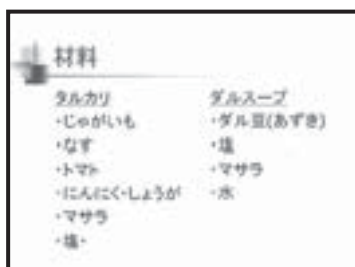
フォトランゲージの約束事

- グループ内で全員参加すること。
- 意見を否定しないこと。

フォトランゲージを通して・・・

- ネパールの良さは？
- 日本の良さは？
- なぜ文化の違いが必要なのだろう？
- 今日の授業を振り返っての感想

資料 C



2008年度 技術家庭 () H () 番 氏名 ()

プリント①

ネパール料理から世界を知ろう！

1. どのような食べ方がありますか？思いつくかぎり考えてみよう

食 べ 方	料 理

2. なぜいろんな食べ方があるのだろう？自由に考えを書いてみよう。

--

3. 世界には様々な食事法があります。以下の地図に食事法の区分を書き入れよう！



() H () 番 氏名 () プリント②

4. 世界の民族は、食べるときに使用する道具によって、三つの文化圏を形成します。

■三大食法文化圏

食法	【①】文化圏	【②】文化圏	【③】文化圏
機能	④	⑤	⑥
特徴	イスラム教圏、ヒンドゥー教圏、東南アジアでは厳しい手食のマナーあり。人類文化の起源。	中国文明の中で火食から発生。中国、朝鮮半島では箸と匙がセット。日本では箸のみ。	17世紀フランスで宮廷料理の中で確立。パンだけは手で食べる。
地域	東南アジア／中近東／アフリカ／オセアニア	日本／中国／韓国／北朝鮮／台湾／その他	ヨーロッパ／ロシア／北アメリカ／南アメリカ
人口	約【⑦】億人	約【⑧】億人	約【⑨】億人

5. 手食のマナークイズ（ネパール版）

①左右どちらの手で食べますか？

()

②食事中、汚れた手でコップをつかんでも良いですか？

()

③大皿に盛った料理は、左右どちらの手を使ってとりますか？

()

④出された食事の量が多い場合はどうしたらよいですか？

()

⑤1日に何度食事をする習慣があるでしょう？

()

⑥水差しで水を飲む場合、気をつけることは？

()

⑦食事中、自分が食べている料理を他の人に勧めることは失礼ですか？

()

資料

() H () 番 氏名 () プリント③

ネパール料理に挑戦！

ダルバードを作ろう！

- ・ダル（豆のスープ）
- ・タルカリ（野菜のおかず）
- ＊今回は野菜のカレー
- ・バード（ご飯）
- （アチャール・漬け物）

ネパールの定食のようなもの。大きなお皿下半分に
ご飯、上半分は3つに区切られていて、それぞれ
タルカリ・ダル・アチャールが添えられる。



〈4～5人分〉 目標

(1) ダル

〈材料〉	〈作り方〉	役割分担
・豆 100g ・ターメリック (小1/2) ・クミン (小1/2) ・塩 (小2) ・にんにくとしょうがをすりおろして混ぜたもの (小2)	(1) 鍋に600mlの水を入れる。 (2) 豆、塩、ターメリック、クミン、にんにく・しょうがを入れ、ふたをして約40分間煮る。 (3) ときどき混ぜる。	

(2) タルカリ

〈材料〉	(2) 炒める。(調味料を加えながら)	役割分担
・じゃがいも 中2個 ・なすび 中2個 ・トマト 大1個 ・油 大3 ・ターメリック 小1 ・クミン 小1(調整) ・塩 小3 ・にんにくとしょうがをすりおろして混ぜたもの 小1 ・にんにく・しょうがのみじん切り 適量	① 油をひく ② にんにく・しょうがのみじん切り ③ じゃがいも ④ ターメリック ⑤ なす ⑥ 塩 ⑦ トマト ⑧ クミン ⑨ にんにくとしょうがをすりおろして混ぜたもの ※必要に応じて、足し水。 (3) フタをして、野菜がやわらかくなったら出来上がり。	

() H () 番 氏名 (

) プリント④

😊ネパールと日本😊

ネパール

〔良いところ〕

〔改善点・必要なこと〕

【衣】	
【食】	
【住】	
【家族】	
【その他】	

日本〔良いところ〕

〔改善点・必要なこと〕

【衣】	
【食】	
【住】	
【家族】	
【その他】	

☆私ができること☆



僕ら地球市民

香川県坂出市立白峰中学校

担当教科：英語

岩田 直美

◆実践教科：道徳、英語 ◆時間数：8時間 ◆対象生徒・学年：中学3年生 ◆対象人数：32名

カリキュラム

◆実践の目的

- ・諸外国の人々の生活や文化に対する関心と理解を深め、固定概念にとらわれないものの見方を学ぶ。
- ・他の国と関わりなく存在することは不可能であり、相互依存、協力関係の中で自国の生活や文化が保たれていることを考える。
- ・英語学習に対する意欲を刺激される。
- ・世界の中の日本、そこに生きる自分を見つめる。

ココがすばらしい！

ネパールの子どもたちの高い英語力を紹介する事で、ネパールの違った側面を子どもたちに提示した。また、多様な題材をもとに様々なワークショップを展開し、生徒が主体的に、かつ幅広い視点から考えられるような授業を実践した。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールを知ろう	英語を読みとろう ①ネパールについて、ペアでインフォメーションギャップのある英文を読み、相手の質問に答えていく ②英語教科書でネパールについて学ぶ	・雑誌「新英語教育」 ・中3英語教科書 (NEW HORIZON3)
2	岩田先生が見たネパールはこんなところ	フォトランゲージ ①班毎に「分かること」、「想像すること」を出し合う ②教師の視察談を聞く	・写真
3	「思いこみ」を打ち破ることが国際理解の第一歩	レヌカの学び ①班毎に18枚のカードを仙台かダランかに9枚ずつ分ける ②正解を知る ③思いこみで判断してまちがったことに気づく ④班内で互いの意見を大切に合ったかなど授業を振り返る	・「レヌカの学び」土橋泰子制作 （ネパール人のレヌカさんが、実際にネパールで暮らしていた時と日本に滞在していた時の行動や考え方の変化をもとに教材化したもの）
4・5	上下関係じゃないよ、国際支援	元協力隊の方の出前講座 ①体験談を聞く ②障害のあるジャヒ君やその家族にしてあげられること ③班内で互いの意見を大切に合ったかなど授業を振り返る ④今日の授業のテーマを自分なりに考え、それについてまとめる。	・写真 ・パワーポイント ・ワークシート
6	他国の子どもたちは何をほしがり、日本について何を知っているのだろうか？	ニュージーランド、韓国、ネパールの子どもの英語を聞こう ・日本について何を知っていますか。 ・将来の夢は？ ・今夢中になっていることは？ ・あなたをハッピーにさせるのは何？	・ビデオ ・ワークシート

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
7	ケニアに行く？ 行かない？	「風に立つライオン」 ①歌を聴く ②歌の背景を知る ③もし自分なら	・さだまさしが 「風に立つライオン」を 歌うビデオ ・ワークシート
8	自分に何ができるだろう？	①心のノートP118、119 ②JICAの方々へのインタビューや活動している ビデオを見る ③これまでの授業を振り返る	・心のノート（文部科学省） ・ビデオ ・ワークシート

授業の詳細

1 時限目 | ネパールを知ろう

生徒はネパールの場所もよく分からない。アフリカだと思っている生徒も少なくない。中3英語の教科書Unit5"Our Sister in Nepal"、"教科書に出てくる国々Nepal"(新英語教育)を通してネパールについて学び、ネパールも、都市部と地方とはかなり違っているらしいということに気づいた。また英語は小学校から学校の教科に入っていることを知った。英文では読みとったが、写真などはないので、「夏にネパールに行くよ」という教師の言葉には後で写真を見せてもらえると期待したようである。

2 時限目 | 岩田先生が見たネパールはこんなところ

JICA三牧職員との(Team Teaching)で、ネパールで撮った8枚の写真を班毎に配り、クイズを入れながら教師が見たネパールの話をしていた。

- ・ネパールと言えば？(牛)
- ・不思議な日本人
- ・一番ほしいものは？
- ・草刈りに行く少女たち
- ・山の中の小学校
- ・ガソリンを待つ人たち
- ・田園風景の中のレストラン
- ・私たちと同じところ、違うところ
- ・子どもたちを学校へ

牛がのんきに寝そべるネパールの道路。現地の人の人だかりの先には、阿波踊りを踊る変な(?)日本人たち。クルタを着た女の子たちが手に持っているのは何かと思えば草刈りガマ。目をキラキラさせて手を挙げる山の中の小学校の子どもたち。遠く離れたところからカトマンズに来て家の仕事を手伝いながら学校に通わせてもらっている子たち。どれも中学生にとってたいへんインパクトのあるものだったようである。



クルタを着て授業

生徒の感想

- ・勉強できるチャンスが少ないからこそ、1つ1つ授業を大切にできるんだなと思いました。その一方でやっぱり、勉強嫌いな子はどこにもおるんやなとも思いました。
- ・ネパールのことがよく分かった。学校になかなか行けない子もいるということが分かって、生活や町の様子などが分かった。
- ・ネパールと日本の学生の生活レベルの差が大きいと思いました。文房具とか、どうにかして日本から無料で分けてあげたらいいと思いました。
- ・ネパールの子どもたちは貧しい面もあるけど、楽しく過ごしているとも思った。

3時限目 「思いこみ」を打ち破ることが国際理解の第一歩

「レヌカの学び」は自分たちがいかに固定概念に左右された見方をしているかを思い知らされた感じである。最初は「きっとこれはネパール」と自信ありげに分けていたが、自分の生活を比べて、「ちょっとまてよ…」と考え込むようになった。例えば、「食事の前には必ず手を洗います」というカードは「これは日本や」と一人の生徒が言うと、「でも、オレ今日の朝、手洗わんと食ったし」と別の生徒。私たちはなんとなくイメージで判断することが多いものだ気づかされた。

生徒の感想

- ・日本では当たり前なのがネパールでは当たり前でないことがあるということが分かった。
- ・ネパールの学校の先生は、生徒が何時間遅刻しても喜んで迎えてくれるというのがいいなあと思った。でもそれだけ危険だったり、通うのがたいへんということかな。
- ・野菜をよく選んで買うというのは絶対日本だと思ってたけど意外にネパールでした。メチャびっくりしました。日本の主婦もけっこう見て選んで買ってると思ったからです。
- ・レヌカさんから見た日本やネパールと、私たちから見たネパールや日本では違っていると思いました。

4・5時限目 上下関係じゃないよ国際支援

タイでの協力隊員経験がある谷さんに出張授業をしていただいた。最初に「タイの写真はどれでしょう」により、タイの生活の格差が大きいことに気づくことができた。教室が明るく、写真が少し不鮮明であったのが惜しかった。

ウムヨム村に派遣された協力隊員が、足に障害があるジャヒくんへの日本からの車いすの寄付を断ったという話を通して、相手の立場に立って考えること、隊員が去った後も、家族で続けていける手立てを考えることも支援であるということを感じ取っていた。

かなり広範囲のお話になるので、今回授業の最後に、生徒自身がこの授業のテーマを考え、それについて感想を書くようにした。感想を読んだ谷さんが、「みんなのを合わせたら、私が言いたかったこと、うまく言えなかったことも含めて全て語られている感じがします」とおっしゃっていたのが印象に残った。前時から2か月半ほどたっていたが、生徒の方にずいぶん考えようとする姿勢ができていたように思った。時期的に、12月という入試の面接練習に入ったところで、将来の夢など考え始めており、青年海外協力隊のように世界に出て行ってみたいなあと思うようになった生徒もいたのがうれしかった。



授業風景

生徒の感想

- ・協力隊の人のように、現地のことを考えてあげたのを聞いて、私も自分以外の人のことも考えてあげなければいけないと思いました。
- ・小さい子も協力して道づくりをしていた。日本でも自分たちにできる最低限のことはしたいと思った。
- ・日本はコンピュータとかいろいろなものが使われているけど、肝心の食べ物などは外国に頼りっきりになっている。もっと必要なことを第一にすべきだと思った。
- ・谷さんが話しているとき、とても楽しそうに話していたし、たくさん学んだし、聞いていていい仕事だなと思いました。相手にも手助けをしてあげられるし、自分も学べていいと思いました。
- ・私は誰かを笑わせたり、喜ばせたりするのが大好きだから、今日の内容も理解できた。誰かのためにできることを見つけるのはなかなか難しいことだと思う。でも笑顔が見られたらうれしい。

6時限目

他国の子どもたちは何をほしがり、日本について何を知っているのだろうか？

ビデオに登場する外国の子どもたちの英語を聞き取ることが主なねらいである。ニュージーランドでは日本を知らない子はおらず、最も知られているのが「新幹線」「東京」でどちらかと言えば、あこがれの国である。ネパールの子どもたちは日本について、国名以外知らない子も多い。また、前回のフォトランゲージで、あるクラスでは、「ネパールの子どもたちは貧しくてかわいそうだ」、「たかが石けんを一番に欲しがってるなんて」、「働いて学校へ行かせてもらってるなんて」と、圧倒的に、「かわいそう、かわいそう」という声が多かったので、このビデオはまた別の一面を紹介するのにとても良かった。

ネパールの子らの英語力の高さ、すべて英語で書かれている厚い教科書に驚き、器材は少なくとも放課後に残って理科の実験をする子らの姿や、将来の夢や自分がどんなときに楽しいと感じるかなど英語で話す同年齢の子の姿に、生徒のネパールに対して自分が持ったイメージがまたガラガラと崩されたようだった。

さらに、留年もあること、貧しくて留年を繰り返してしまう子と勉強するゆとりがあってどんどん進んでいく子らの差がでていることから、日本のどこでも同じ教育を受けられることの幸福さ、ある意味甘さを感じたようだった。教室の中は「え？」ととまどいがあふれていた。実際、カラー写真やビデオ、CD、DVDでほんの少量の英語を何時間もかけて勉強する日本の中学校、英語力は…。何がどうなっているのだろうか？？と考えずにはいられない。

7時限目

ケニアに行く？行かない？

さだまさしが「風に立つライオン」を紅白歌合戦で歌ったときのビデオ(H20)で授業を始めた。若き青年医師の生き方を参考にして作られた歌である。「難民キャンプに医師が必要とされていることを知って、自分ならケニアに行くか行かないか？」、「結婚を目前にしていた自分の恋人がケニアに3年も行くと言い出したら、自分はどうかするか。」

前回、協力隊の方のお話を聞いて、「開発途上国で何か自分のできることをすることは、自分にも勉強になることがあり、また誰かを助けることができる。双方にいいことがある。」ということを知っていることもあり、「一緒に行く」という意見が多かった。「一緒に行く」という選択肢をなしにすると、「本人がやってみたことをだからぜひ行って頑張ってもらいたい。」「私は待っているから。」という意見が出た。

生徒の感想

- ・自分の決断で失うものもあるかもしれないけど、やっぱり一番大事なのは自分の夢なんだと思った。「風に向かって立つライオンのような生き方」とは、夢に向かって生きるといろいろな辛いことや投げ出したくなることがあるかもしれないけど、負けずに強く生きるとのことだと思う。
- ・突然アフリカの難民の話を出されたら、ぼくは行くと思う。アフリカのように初めていくところでは、新しい感動や驚きがあるけれども、そんな中一番うれしいのは残してきた人の幸せなのかもしれないと思った。(将来医者志望の生徒)
- ・人生には自分の人生を左右する選択が何回か必ず訪れるのだと分かった。どちらを選択しても後悔だけはしたくない。
- ・今日の授業で一つのことを決める勇気や大切さなどを知りました。自分だけの意見で選ぶとその家族も困るだろうし、3年間もアフリカに行となれば、決して楽な生活じゃない。今後自分の進んでいく道を自分自身や家族と向き合いゆっくりと考えていきたい。
- ・もし自分にこのことと同じような選択をしなくてはいけないとなったら、今はたぶん決められない。でも、いつか、自分で選択しなければいけないときがきたら、人の役に立つため、自己実現のためということをもとに決めたい。

8時限目 | 自分に何ができるだろう？(実践予定)

義務教育を終えて高校生になるにあたって、自分の意志でいろいろな活動ができると思われる。これまでの授業を生かして、何らかの行動に出る生徒がいてくれたらなあと思う。また日常生活や物事の考え方の中に、これまでの学びが役立ってくれることを願っている。

成果と課題

成果

- ・これまで国際理解教育というものを取り立ててしてこなかった自分にもこのテーマで継続し、また段階を追って授業を組み立て実践することができたこと、それが生徒の発達段階にもうまく合っていたと感じられた。
- ・実物資料や写真が生徒の意識を集中させたり、イメージをふくらませたりするのにたいへん有効であることが分かった。
- ・人権学習(就職差別、在日コリアンについて)と今回のネパールについての一連の授業が重なり、環境問題も含めて、全て切り離して考えるものではないということが生徒の中に残った。
- ・自分自身も生徒もJICAや協力隊の人の活動が理解でき、国際協力に対する興味が喚起された。特に、外国で自分にできることがあるかもしれないと考える生徒が現れた。
- ・生徒たちが、班学習を通して、友人の意見を聞いたり、自分の意見を述べたり、人との交わりを通して自分の考えをまとめていく過程を楽しむようになった。
- ・学級通信とつながりを持たせ、保護者にも学習内容を伝えることができ、それに関する声が返ってきたこと。

課題

今回自分の学級が主になり、別のクラスでは全ての過程を通して行うことはできなかった。もっと多くの生徒たちとネパールで見たこと、聞いたことを通して話をしたかったと感じている。まだ彼らが卒業するまでに時間があるので、2月以降に何らかの形で活用したいと思う。英語の教科書には、文化、環境、人権、福祉、平和と、地球上に生きる人類が必ず出くわすテーマが満載である。今後も英語教員の特権としてそれらを受け止め、これまで自分が諸外国で集めた資料を工夫して使い、だれもが「地球市民」であること、日本人の生活が世界中の人たちとつながっていることを、生徒と共に考えていきたい。そして生徒に、高校生になっても大人になっても身近なことから始まる国際感覚を持って生活いくことを伝えていきたい。





研修を活かした授業実践例

【高等学校・高等専門学校編】

教師および生徒の原文を生かして掲載しておりますので、
一部表現のばらつきがありますがご了承ください。



ネパールで生きる人々と日本の私

愛媛県立三島高等学校

担当教科：地理歴史・公民

合田 明典

◆実践教科：世界史A ◆時間数：3時間 ◆対象生徒・学年：2年商業科2クラス ◆対象人数：77名

カリキュラム

◆実践の目的

今年度は総合的な学習の時間の担当をすでに終了しており、今回の研修の成果を生徒に還元するために、世界史Aの授業を選んだ。年間計画の中から3時間しか捻出することができなかったため、限られた時間で何を伝えるのか焦点を当てて取り組む必要があった。そこで、次のような順序で授業を進めることとした。

- ①ネパールについて概略を理解し、興味・関心や知的好奇心を持たせる。
- ②共感的態度で異文化理解を進め、ネパールの抱える諸問題を考えさせる。
- ③ネパールの人々と自分自身の生き様を比較させ、彼らから学ぶことにより、生き方の変容を目指す。

現在の日本は拝金主義や自己中心主義が蔓延し、コンプライアンス(法令遵守)の名の下に、法にさえ触れなければ何をしてしても許されるという道德心の欠如が見られる。さらに最近では法に触れてもばれなければいいと言わんばかりに食品等の偽装事件を始めとする諸事件が発生している。生徒たちはその影響を受けており、青年期の若者が持つべき崇高な志や生き方の模索を阻害している。

また、私自身ネパールの学校を訪問して、厳しい環境下にありながらネパールの子どもたちが目を輝かせながら学んでいる様子に感銘を受けた。一方日本では、目をよどませながら惰性で学校に通っている生徒も多く、この違いは何なのだろうかということを考えざるを得なかった。そして、このことを生徒たちに考えさせることにより、日本の生徒が抱える問題を打ち破り、自己の在り方に気付き、生き方を模索する一助となると考えた。そして、いずれ国際協力に向け、共感と理解を持って取り組む市民として成長するきっかけにするため、今回の学習を設定した。

ココがすばらしい！

視覚・聴覚・嗅覚に訴えた工夫あふれる導入を行い、生徒に期待感と興味を持たせた。生徒がネパールを知ることによって日本や自分たちの生活について振り返ることができる授業を展開。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールを知ろう ネパールクイズを通し、 ネパールに対して親しみ と関心を持つ	①ネパール音楽を聴く ②ネパールのお香をたく ③ネパール学習の目的を説明する ④ネパールの場所を地図で確認し、学習プリントの 白地図に色を塗る ⑤学習プリントを使い、ネパールクイズに挑戦する ⑥クイズの解答について、話し合いをする ⑦パワーポイントを使って生徒に答えを予想させな がら解答をし、その内容について解説する	・パワーポイント ・アジア地図 ・学習プリント(1) ・ガネーシャ像 ・サラスワティ像 ・ネパール音楽 ・ネパールのお香
2	フォトランゲージに挑戦 写真から情報を読み取り、 班で話し合うことにより、 ネパールの風土や文化、 課題について理解を深め る	①フォトランゲージについて説明する ②パワーポイントを使い、フォトランゲージの練習 をする ③6班を編成し、フォトランゲージを実施する ④代表者が発表をする ⑤パワーポイントを使い、補足説明をする	・パワーポイント ・アジア地図 ・学習プリント(2) ・写真×6枚 ・封筒、鳥の子用紙、 付箋

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
3	ネパールに生きる人々と日本の私 ネパールで学ぶ子どもたちの様子、日本で生きる自分自身の姿を相対化させ、国際協力の重要性や自己の在り方生き方について考えさせる	①ネパールの人々の様子を見る ②ネパールの子どもたちが学校で学ぶ様子を見る ③青年海外協力隊の活躍する様子を知る ④ネパールの子どもたちが置かれた生活環境や学習環境について考える ⑤不十分な環境の中でも「人の役に立つ」生き方を志し、生き生きと学ぶネパールの子どもの姿を紹介する ⑥「サンガイ・ジュネ・コラギ」のエピソードを紹介する ⑦日本に生きる自分自身の生き方や学ぶ姿勢について考える ⑧ネパールについて学び、感じ、考えたことを学習プリントにまとめる	・パワーポイント ・アジア地図 ・学習プリント(3) ・トピー

授業の詳細

1 時限目 | ネパールを知ろう

ヒンドゥーの神様の像や絵を飾り、ネパールの音楽をかけ、お香をたき、雰囲気を盛り上げて興味・関心を持たせることに努めた。視覚、聴覚、嗅覚に訴えたわけだが、生徒の反応はよく、特にお香は興味津々で自分から香りを嗅ぎにいき、多くの生徒が歓声を上げていた。

その上でネパールについて学ぶ意義を、私が今回ネパールを訪問しようと思った心情を語るにより説明した。

世界にはたくさんの文化や価値観があること、視野を広げて異文化を知ることにより自分自身を相対的に見ることができること、異文化を理解することが共に生きる第一歩であること、途上国を見る時に決して上からの目線で見のではなく人間として尊敬や尊重の念を持つことが大切であることなど、こちらが投げかけることを生徒たちは真剣に聞いていた。

授業の内容としては、まず地図でネパールの場所について確認し、ネパールクイズを実施した。分からないところは話し合いをさせ、生徒に質問をしたり、なぜその答えを選択したのか理由を考えさせたりした。最後にパワーポイントで写真を織り交ぜながら解答・解説をした。



ネパールってどこだっけ？

(1) ネパールの位置を地図で示しなさい。(正答率92.3%)

※白地図に記入

※インド文化圏の影響が強いことを、ヒマラヤ南麓に位置する地理上の特徴から考えさせた。

(2) ネパールの首都は次のうちどこでしょう？(③正答率41.0%)

①ニューデリー ②スラマバード ③カトマンズ ④ダッカ ⑤スリジャヤワルダナプラコッテ

※分立前の大インドであるインド・パキスタン・バングラデシュ・スリランカの首都と対比させ、周辺諸国の歴史上の経緯を理解させた。

(3) ネパールの正式名称は何でしょう？(②正答率23.0%)

①ネパール王国 ②ネパール連邦民主共和国

※2008年5月末に王政が廃止になり共和国になったこと、王室殺害事件やギャレンドラ国王への不満、マオイストの暗躍などの政治不安と民衆への影響を説明した。

(4) ネパールの人口はどれくらいでしょう？(③正答率15.4%)

①約30万人 ②約300万人 ③約3000万人 ④約3億人

※ここ数年で人口が急増し、カトマンズに流入している様子とその影響について考えさせた。

(5) ネパールの面積はどれくらいでしょう？ (①正答率89.8%)

- ①日本の半分くらい ②日本と同じくらい ③日本の倍 ④日本の10倍

(6) ネパールは山岳国家ですが、標高差はどれくらいあるでしょう？ (④正答率12.8%)

- ①約1000m ②約2000m ③約4000m ④約8000m

※日本の約4割の面積のネパールの標高差が約8000mもある地理的制約が、交通網の整備や流通、子どもたちの通学など生活全般に渡って影響していることを考えさせた。

(7) ネパールの一人当たりの国民所得はどれくらいでしょう？ (①正答率33.3%)

- ①日本の約1/150 ②日本の約1/50 ③日本の約1/15 ④日本の約1/5

※ネパールの一人当たり国民所得が約2万7500円にとどまっていることから、ネパールの抱える経済的問題について考えさせた。

(8) ネパールで生まれた宗教上の偉人はだれでしょう？ (②正答率74.4%)

- ①イエス=キリスト ②仏陀（ブッダ） ③ムハンマド ④ガネーシャ

(9) ネパールで約8割の人が信仰している宗教は何でしょう？

(④正答率41.0%)

- ①キリスト教 ②仏教 ③イスラム教 ④ヒンドゥー教

※ネパールの人々の生活が宗教に密着している様子を伝えた。

(10) ネパールはどのようにして食事をするのでしょうか？ (③正答率100%)

- ①お箸を使う ②ナイフとフォークを使う ③直接手で食べる

※食事、トイレなど異文化の生活について考えさせた。



ネパールクイズに苦戦中・・・

生徒の感想

- ・今年王国ではなくなり、王様がただの一市民になったということに驚いた。よっぽど不人気だったのだろう。今はどんな生活をしているのだろうと想像してしまう。
- ・日本の4割ほどの面積しかないのに、標高差が8000mもあるということは、国中が急斜面になっているのではないか。道路を作るにしても、国内を移動するにしても大変だと思う。学校に行く子どもは、いつも山道や坂道を歩いているのだろうか。
- ・ほとんどの人がヒンドゥー教を信仰していたのは意外だった。仏教徒の多い国だと思っていた。
- ・お釈迦様は今ではネパール人ということを知り、何だかネパールを身近に感じた。
- ・食事は右手、トイレは左手と、手を直接使うことが多い。世界にはいろいろな文化があると改めて実感した。食事は試してみたい気がするけど、トイレはなかなかです。

〈所感〉

上記の通り、四択形式を中心にクイズを作成して実施した。各問題の解答の解答を出す前に生徒を指名し、自分の答えとその理由を発表させた。生徒たちの反応は良く、パワーポイントで解答を出すたびにどよめきが起った。正答率が極端に低い設問もあり、生徒たちはその予想外の結果に驚いていた。なかでも8000mもの標高差や、国民所得の低さに言葉を失っていた。

2時限目 | フォトランゲージに挑戦

まず始めに、フォトランゲージの方法について説明し、サンプル写真で練習をした。

次に班分けを行い、封筒内に入れた写真を見て各班で話し合いをさせた。生徒たちは興味を持って取り組み、予想以上に活発な意見交換がされていた。最後に、各班の代表者が発表をし、補足説明を行った。班は6班を編成し、以下の写真を使用した。



写真を見て話し合う生徒



ガソリンスタンドに並ぶ長蛇の列



作動していない信号機



悪路にはまったトラック



共同水場で洗髪する女性



道路に横たわる牛



バグマティ川と火葬の様子

生徒の感想

- ・日本もガソリンの価格が急上昇して大変だけど、手に入るだけ幸せだと思った。丸一日もガソリンスタンドに並ぶなんてありえない。並んでいる人はその時間、仕事は大丈夫なのだろう。
- ・カトマンズは人も車もバイクもすごく多く、信号なしであれだけの交通量が交差点に突っ込んでいくという交通事情はすさまじかった。事故が起こらないのが不思議なくらいです。
- ・バイクの二人乗りが多かったけど、後部座席に人がヘルメットをかぶっていないので危ない。
- ・共同の水場を使っていた。私なら人前(しかも道端)で髪を洗ったりするのは嫌だけど、もしも家の中に水道がないのなら仕方なくそうするのかも。
- ・水場では洗濯もしていた。家の近くに水場があればいいけど、もしなければどうするのだろう。
- ・火葬の写真は衝撃的だった。日本では亡くなった方の遺体を目にすることはそうはないけど、ネパールでは身近ことなのかもしれない。
- ・ネパールの人は、宗教に対して前向きだと思いました。彼らからすると、日本人の神様への信仰心の薄さに驚かれると思う。



発表する生徒

〈所感〉

生徒たちは初めての取り組みでありながら大変意欲的であり、雲の様子から気候、建物の様子から耐震性など、私が予想した以上に細かなことまで発見して話し合うことができた。発表に関しては、班の中で出た意見を読むことで精一杯であり、本質をうまく突くまでには至らなかったが、班の代表者が一生懸命に発表することができた。

3時限目 | ネパールに生きる人々と日本の私

これまでの2時間の授業で学んだことをもとに、パワーポイントを使ってネパールの人々の様子や学校で学ぶ人たちの様子に触れ、私自身が感じたこと、伝えたいことをダイレクトに生徒たちに投げかけた。最初に、改めてネパールの社会や学校の様子を紹介した。特にネパールの学校で学ぶ子どもたちの様子や、学校に行きたくても行けない多くの子どもたちの現状、ノンフォーマルスクールの様子については、食い入るように見ていた。次に、決して恵まれているとは言えない環境で学んでいるにもかかわらず、将来は人の役に立つ仕事をしたいと答える子どもたちのことを紹介した。また、岩村昇氏の「サンガイ・ジュネ・コラギ」の話を紹介した。そして最後に、日本の社会や自分自身の在り方について見つめさせた。



学校に行けているのだろうか



生徒と同じ年くらいの働く少女

生徒の感想

- ・養護学校で若い女性が青年海外協力隊員として働いていた。同じ日本人として、何だか誇らしい気持ちになった。また、同世代として刺激を受けた。
- ・ネパールに限らず、世界中には学校に行けない人や勉強が好きで勉強したいのにできない人がいっぱいいるのに、私は勉強なんか嫌いで学校にはできれば行きたくないと思っていて自分が恥ずかしくなりました。
- ・ネパールの人たちの生活を見て、もっと1日1日を大切に生きていかなければいけないと思いました。私は勉強があまり好きではないので、今回をきっかけに学ぶことのありがたさを忘れないようにしたいです。人のために尽くす人生を過ごしたいと思いました。
- ・ネパールの授業を受けて、自分はとてもわがままで人のことをあまり考えずに生きていたと思います。僕もネパールの人を見習って、人のために生きると言えるような生き方をしていきます。
- ・この3時間のネパールについての授業を受けて、ネパールについての感じ方が変わりました。はじめは貧しい国を見ても「あの国へ生まれなくてよかった。」などと軽い気持ちで見ていたけど、この3時間で自分の心の中が変わりました。今までは面倒くさがっていたけど、これから募金をするチャンスがあれば自分から動いていきたい。
- ・かわいそうと思うのではなく、身近な募金などの活動をしたり、今ある生活を大事に思って毎日を大切に生きたいです。ネパールの授業を通して、そして今日の授業はとても感動しました。長くて書き切れませんが、なんだか泣きそうでした。
- ・私たち日本人は、生活は豊かですが決して心は豊かではありません。他者のことを考えるのは二の次で、第一は自分自身になっていると感じます。私もいつの間にか互いを比較しあい、他人の能力をうらやむようになっていました。ネパールの人々のように互いが学び合い、協力しながら日々を送ることができなくなってきたんだと、写真の一枚一枚から痛感しました。

〈所感〉

多くの生徒は、貧しい環境にめげずに生き生きと勉強をするネパールの子供たちと、自分が学校生活や勉強に取り組む姿勢を比較し、自己の在り方を内省的に振り返っていた。また、日本は自分さえよければいいというミーイズムが蔓延しており、自分のことよりも人の役に立つ生き方を志すネパールの人たちに学ぶことは多いという意見が多かった。



小さな手に隠れる鉛筆



あなたの夢は何ですか？

成果と課題

3時間の授業の全編を通してパワーポイントを活用した。最初に2時間は、暗く重い雰囲気にならないように配慮し、自由かつ楽しい雰囲気ですべてを進めた。最後の時間は、ネパールの子どもたちの現状と勉強に対する意欲を伝えるとともに、私自身が伝えたいことを正直に生徒たちに投げかけてみた。生徒たちの感想を見ると、その投げかけに真摯に応え、自己を見つめて自己変容を図ろうとする者が多く、手応えを感じた。ネパールに生まれなくて良かったというような否定的な感想は見当たらず、人間としての尊厳を尊ぶ姿勢を涵養することについても、一定の成果があったのではないと思う。

私は学生時代等にアジア・アフリカを旅行し、訪れた国々で学校を訪問した経験がある。その体験を生徒に伝えようと、これまでもHR活動や教科においてスライド等で説明しようと試みたことがあった。しかし、生徒の関心をうまく引きつけることができず、ややもすると私の自己満足、もしくはただの自慢話のようになってしまい、その手応えのなさに自己嫌悪を味わうこともあった。

今回の私の取り組みは、実物教材を使って視覚や聴覚や嗅覚に訴え、パワーポイントを使ってクイズやフォトランゲージを行い、心情に訴えることが中心だった。幸いにも生徒の反応は上々で自分か経験したことをいかに生徒たちに伝えていくかという一つのモデルプランを作ることができた。

今後の課題としては、まず1つ目に、このモデルプランにいろいろな味付けをしながらいかに充実・発展させていくかが挙げられる。例えば、生徒たちは「サンガイ・ジュネ・コラギ」のエピソードにも感銘を受けており、その話に特化した展開も実施したい。また、JICAが発行しているパンフレット「学校へ行きたい」や、少し古い書籍であるが「もしも世界が100人の村だったら」についても、今後教材として取り上げたい。

2つ目は、今回の取り組みをいかに継続させていくかである。今回の授業は2年生商業科2クラスの世界史Aで実施しており、すでに作成している年間計画の中から時間を捻出する必要があった。今後の教育課程上の位置付けについて、考えていかなければならない。

最後に、今では私が教室に入ると、多くの生徒が手を合わせて「ナマステー」と言うようになり、校内で小さなブームとなっている。2学期終業式では、冬休み前の生徒課長講話の題材をネパールに求め、全校生徒に自分の在り方について問いかけることができた。これからも今回の経験を生かし、日々の教育活動の中で国際理解教育を推進していきたい。



ヒンドゥー教の神々の国



仏教・お釈迦様生誕の国



ネパールの現状を通して国際協力を考える

香川県立高松高等学校

担当教科：英語

佐野 智子

◆実践教科：ホームルーム

◆時間数：2時間

◆対象学年：普通科2年生

◆対象人数：42名（男子18名、女子24名）

カリキュラム

◆実践の目的

最近、海外に行く若者が減少している。海外赴任や海外留学はもちろん、海外旅行に行きたがる者も減っている。一方で、国際社会に生きる日本人の育成として、国際理解教育の重要性はますます増えつつある。ただ、これまでの国際理解教育では異文化理解を中心に行われており、国際協力までは踏み込めていない。2年生はこれまで英語の授業で、国境なき医師団、国連難民高等弁務官として活躍された緒方貞子氏、学校に行きたくても通えないエチオピアの少女等について学習をしてきた。そこで学習した知識と、今夏ネパールでのJICAの教師海外研修の成果を踏まえて、国際理解のもとに国際協力できる力を育みたいと考えた。

ココがすばらしい！

教科書に掲載されている国際協力の事例を踏まえ、身近な国際協力で何ができるかということを紹介し、自分達に何が出来るか考えさせた。国際協力は遠い世界のものではないということをグループワークを通じて発見できる授業を実践した。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
《参考》 (関連教材として) 英語Ⅱ（5時間） 「Samia Sadik」	Samia Sadikというエチオピアの18歳の少女が、「女性は早く結婚して子供を育てることが幸せであり、教育を受ける必要はない」という村の伝統を破って、教育を受け続ける姿を知り、開発途上国での教育の現状、男女格差について学ぶ。	啓林館 ELEMENT English CourseⅡ
英語リーディング (6時間) 「Ogata Sadako」	緒方貞子氏の国連難民高等弁務官としての活躍を通して、世界の紛争地域の現状、国際問題、人権問題に取り組む人々について学ぶ	文英堂 UNICORN English Reading

授業の計画1 (1公開授業)

授業の流れ	学習活動	指導上の留意点	使用機材
〈導入〉 ネパールについて	ネパールクイズ	班ごとに考えさせる。 ネパールの概要について知る	パワーポイント
〈活動〉 1. 写真を見てネパールの現状を考える。	班ごとに2枚の写真を見てわかることをできるだけ書き出す 各班ごとに発表	できるだけ多くの意見が出るように付箋を用意する	写真、付箋、模造紙
2. 発表 3. 説明	それぞれの写真の説明を聞く 写真を見ながら説明を聞く	班の代表1名が発表 どんな支援が必要かを考えさせる	パワーポイント 資料
4. 国際協力について知る	* 青年海外協力隊 * シニア海外ボランティア * その他		
5. 青年海外協力隊について	資料を見ながらどのような職種があるかを知る 自分の興味のある職種を探す	様々な職種があることに気づかせる	
まとめ	感想を書く		プリント

授業の計画2 (予定)

授業の流れ	学習活動	指導上の留意点	使用機材
〈導入〉 前時の復習	青年海外協力隊の職種をみて自分のやりたい職種を班の中で発表する	班ごとにわかるる 他人の意見をよく聞く	資料
〈活動〉 1. 青年海外協力隊の活動を知る	青年海外協力隊のビデオを見る。	班の代表1名が発表	VTR
2. 感想を話し合う	各班で話し合って、その後代表が内容を発表	意見を板書して考えさせる	黒板
3. 海外でボランティアをする場合の問題点考える。	各班で話し合い、その後代表が発表	前回のアンケートの意見も参考にする	資料
4. 解決法を考える	意見を発表	できるだけ解決案が出るようにいろいろな角度から考えさせる	
まとめ	感想を書く		プリント

授業の詳細

1 ネパールクイズについて

ネパールの位置、宗教、食べ物、産業について質問。グループ対抗で答えさせた。位置については全班正解したが、宗教、食べ物、産業については不正解の班がちらほら。しかし、ガネーシャの写真を見せながら、ヒンズー教の話をすると、ちょうどテレビドラマで「夢をかなえるゾウ」をやっていることもあり、親しみを持ったようだ。続いて「野良牛」に関するクイズを出すと、さすがに最初は正解者がいなかったが、ヒンズー教をヒントに答えを思いついた生徒もいた。

ネパールクイズ

1. どの宗教を信じる人が一番多い？

- ① 仏教
- ② イスラム教
- ③ ヒンズー教

ネパールクイズ

2. 食べ物は、次のどの国の食事に近い？

- ① 中国料理
- ② インド料理
- ③ タイ料理



ネパールクイズ

3. 主要な産業は何？

- ① 農業
- ② 観光業
- ③ 鉱工業

これは何の動物でしょう？



2 グループ活動について

各班2枚ずつの写真を見ながら、わかることを書かせた。班によって、意見の出方はまちまち。やはり学校の写真についての意見は出しやすかったようだ。

使用した写真の例



工事現場



家庭での水の利用



点灯しない交通信号



ノンフォーマル教育の様子

3 国際協力について

ネパールで活躍されている青年海外協力隊員、シニアボランティア、専門家、JICA職員の仕事を紹介。時間が足りず、十分なことが説明できなかったのが残念であった。その後、青年海外協力隊の職種一覧を見せて、自分にできそうな仕事を考えさせた。時間があれば、何人かに発表させる予定であったが、できなかったもので、次回に行うことにした。

4 ワークシートの記入

*資料1 参照

生徒の反応

- ネパールについて何も知らなかった…。ネパールには何があるのだろう。
- 勉強したくてもできない子供たちがいるということを恵まれている自分はつつい忘れてしまっている。
- 想像していた以上にネパールの環境は厳しいと思った。私たちの班はネパールの学校の写真からいろいろと考えた。子供たちの登下校道の危険なことに一番驚いた。

生徒の反応

- ガソリンを入れるのに半日かかるなんて！電気がこない時間があるなんて！学校への登下校の道があんなに危険だなんて！驚くことがたくさんありました。
- 自分たちが当たり前のように受けている学校の授業がすごく恵まれたことなんだと実感しました。
- 自分の持っているイメージよりも貧富の差はまだまだあって、自分たちにとって電気や水がないなんて考えられないことだけど、そういう子供もいる。自分たちは裕福だと思った。
- ネパール以外にもこのような国があるのが興味がある。
- 日本に住む我々はとても恵まれた環境で教育を受けられているのだと思った。厳しい教育環境の中で勝ち抜いて進学した一握りの人は、絶対我々よりもレベルが高いと思う。
- ネパールは自分が思っていた以上に大変な状況だとわかった。やっぱりボランティアなどの国際協力は必要だと思った。
- まだまだ格差があるのだと思った。貧しい国のことを何も知らないのはよくないことだと思う。

アンケートの結果

＊ 将来海外でボランティアをしてみたいと思うか？（はい 40%・いいえ 60%）

＊ はいと答えた人に … どんな職種でやってみたいですか？ その理由は？

- 栄 養 士 … 文系なので難しいけど、とことん考えられるとしたらこの分野。
食事を改善することで病気なども防ぐことができる。大事な分野だと思う。
- 剣 道 … 教育文化面でその国全体を豊かにするとともに、弓道や剣道などの日本独特の文化を海外に広める活動をしてみたい。
- 食品加工 … 安全な食品を作りたいから。
- サッカー … 今自分にできることはほとんどないけど、サッカーなら少しは教えられるから。
- テ ニ ス … 一緒にテニスがしてみたい。
- その他、スポーツ関係、語学関係が多かった。

＊ いいえと答えた人に

その理由はなぜですか？ ボランティア以外で国際協力できそうなことはありますか？

- 治安が怖いから。けれども、海外ボランティアには小学生の頃から興味がある。今は募金には積極的に参加している。
- 伝染病やウイルスにやられる恐れがあるから。しかし、伝染病対策をするのも私達の役目だと思う。
募金活動やボランティア団体の手伝いができたらいいと思う。
- 体力がないから無理だと思う。ユニセフ募金などに参加しています。
- 海外の生活になじめそうにないから。
- 自分のことで精一杯なので、今は考えられない。今後できそうなことを考えていきたい。
- 言葉が通じないから。募金をする。
- 海外に行くのに時間がかかるから。
- 協力したいけど、まだ今は勇気がない。せめて募金などの身近なことから始めようと思った。

成果と課題

成果

①教師としての成果

今回、この研修に参加させていただくことによって、自分の目で開発途上国の実態を知ることができた。英語の教材には数々の国際問題、開発途上国の問題、また海外で活躍する人々が出てくるが、「百聞は一見にしかず」で、自分の言葉で生徒に話ができることは、説得力もあり効果的でもある。研修の内容を直接に伝える時間は十分に取れなかったが、さまざまな国際協力や国際関係、世界の地域問題を取り上げた教材の中で、折に触れ、この研修での体験を積極的に話し、生徒に身近な問題として捕らえてもらうように心がけている。

②生徒にとっての成果

水や電気など、我々が当たり前だと思っているものが手に入らない人々が今でも、ごく身近なアジアの国にもあるのだということを実感し、自分たちの恵まれた環境、世界における日本の立場や役割を考えるきっかけとなった。同じアジアの国のことでも、自分たちがいかに知識がないかということにも気づいた。

UNHCRやUNESCOなど、国連の様々な専門機関については社会や英語などの教科で取り上げることが多いが、JICAの活動については、これまであまり知ることがなかったと思われる。青年海外協力隊の活動など、身近に様々な分野で自分の持つ様々な能力を生かせる分野があることを知り、将来の進路の選択肢が増えたと感じてくれた生徒がいたらうれしく思う。

課題

開発教育や国際問題に興味、関心を持っている生徒はかなりいると思われるが、まとめて取り上げる時間がなく、次の点について深く掘り下げて生徒達に十分伝えることができなかった。

- ・日本もかつては諸外国からの援助によって戦後の混乱から復興し、発展したこと。だから援助は大切で、しなければならないものであること。
- ・開発途上国への援助は、金や物資だけでは不十分なこと。さまざまな技術や知識を伝え、それを活用できる地元の人材を育成することが大切だが、上から一方的に教え込むというやり方では無理で、その国や地域の特性を理解した上で教えていかなければならないこと。つまり、国際協力の基本もまず人とのコミュニケーションだということ。

資料

1

2年()組()番 氏名()

1. ネパールについてわかったこと、考えたこと

2. 海外でボランティアをしてみたいと思いますか？ (はい・いいえ)

* 「はい」と答えた人

どんな職種でやってみたいですか？ 理由も書いてください。

* 「いいえ」と答えた人

その理由は何ですか？

ボランティア以外で国際協力できそうなことはありますか。

参考資料

- ・独立行政法人国際協力機構 中部国際センター 編
「教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻 ～人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ～」
- ・JICA 青年海外協力隊事業紹介ビデオ「協力隊ってなんだろう？」
- ・JICA H20秋 青年海外協力隊、日系社会青年ボランティア募集資料



ナマステ! ネパール!

高知県立高知南高等学校

担当教科：国語

嶋崎 京都

◆実践教科：総合的な学習の時間・LH ◆時間数：8時間 ◆対象学年：高校3年生(国際科学科・国際教養科) ◆対象人数：68名

カリキュラム

◆実践の目的

本校には国際関係に関する学科が2科設置されている。このうち間もなく卒業を迎え社会に巣立っていく高校3年生に以下の2点を主な目的としたネパールでの体験に基づく実践授業を行った。

1. 今までよりもさらに世界の国々に目を向け、世界に貢献できることは何かを自ら模索することのできる人物となるきっかけ作りをすること。
2. ネパールの人々の暮らしを知り、日本で暮らす私たちの暮らしを振り返ることによって、自尊感情の向上と他人への思いやりの精神を育むことを目的とした。

ココがすばらしい!

ネパールを伝える前にまず世界全体のこと、自国のことを伝えるという観点が素晴らしい。様々なワークショップを取り入れた授業を実施し、世界の中のネパール・世界の中の日本について考える授業を実践した。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 ・ 2	世界を知る 日本を知る 世界の国々の識字率や人口に対する財産の割合などを知り、自国の世界における立場を知る	①「世界がもし68人の村だったら」を実際に2クラスで行う ②世界の国々の現状や世界における日本の立場について考える	・100人村を行うキット ・本時の振り返りシート
3	ナマステ! ネパール! 研修報告を示すことでネパールに関心を持ち、ネパールについて基本的知識を持つ	①ネパールの基本的知識を学ぶ ②パワーポイントを用いたネパールでの研修報告を見て感じたことを振り返りシートに記入する	・パワーポイント ・本時の振り返りシート
4	もっと知ろう! ネパール! ・日本とネパールの違いを知る ・違いからの「気付き」を共有する(生活ぶりの違いに気付き、自分と比較し考えることができる)	①「教育」「衣」「食」「住」についての説明に重きを置いたパワーポイントを見て説明を聞き、日本との違いを認識する ②それぞれが感じたことを振り返りシートに書く	・パワーポイント ・本時の振り返りシート
5 ・ 6	貿易ゲームで世界を体感しよう! ・貿易ゲームを通して、世界がつながっていることを意識することができる ・先進国である日本の役割を考えることができる	①世界の人々はつながっているということを改めて認識する ②世界の中の「わたし」を改めて見直し、その暮らしぶりを考える ③日本の置かれている立場を考え、世界のために日本は何ができるのかを考える	・貿易ゲームのキット ・班別振り返りシート ・本時の振り返りシート
7 ・ 8	わたしたちにできること ・JICA高知デスク松尾泰輔さんと世界を救う高知大学国際協力団体すきっぷの松本健一さんからこれまでの取り組みの実体験を聞き、国際理解を深めるとともに、身近な国際協力の手立てを考えることができる ・一人ひとりが世界を動かす原動力をもった貴重な存在であることを理解する	①松本さんの活動している高知大学国際協力団体の取り組みを知る ②松尾さんからJICAや、世界における日本の支援のあり方や青年海外協力隊として行かれた経験を聞く ③世界の子どもたちに対し、何かわたしたちにできることはないかを考え書き出す	・ワーポイント ・ワークシート

1・2時限目 世界を知る 日本を知る

ネパールのことを知る前にもっと世界全体のこと、そして自国のことを知らなければこの研修で学んだ成果を発揮することはできないと考え、「世界がもし68人の村だったら」を2時間行った。

授業に際してはJICA四国・高知デスクの松尾泰輔さんにもファシリテーターとして細かい補足をしていただきながら進行了。



- ①自分の住む地域や言語、性別などの書かれたカードを全員に配布した。次にカードに記載された国のことばで「こんにちは」を発しながら、同じ言語をしゃべる人々とグループになってもらった。仲間のいない人には前に出てきてもらい、実際にどんな言語で「こんにちは」というのか発音してもらった。
- ②「座ってください」とネパール語で書かれた紙を見せた。自分のもらったカードにその意味が書かれてある人だけが座った。これが識字の割合であることを説明し、世界での識字の男女比なども合わせて理解を促した。そして、立っているグループの中から6人を選び、2人×3組を作らせ、病人と家族のロールプレイを行った。1人が病人役、もう1人は薬を買いに行く。ネパール語で「薬」「水」「毒」と書かれていたが、3人とも分からないまま一つずつ選び、病人役の人がそれらを飲んだ。文字が読めないということはということなのかを体感してもらい「不安だった」などの感想を述べてもらった。
- ③大陸ごとに長さの違うロープを配置し、自分のカードに書かれた大陸に入ってもらった。特にアジアでは人が多く「暑い」「苦しい」という声が聞かれた。次に富の分配を行った。各大陸の所有している富を各国に飴を配ることで示した。特にアジアでは、分配した飴のうち日本人がその約半分を所有することを示した。そして、それらを各国の人たちで分けるのかを話し合わせた。「奪いに行く」「多い人から分けてもらいたい」などの声が聞かれた。
- ④まとめを行った。世界にはたくさんの人々が生活していて、そのすべての人々に幸福に生きる権利が与えられているはずなのにすべての人が幸福というわけではない。私たち日本人の生活は恵まれているが、私の研修に行ったネパールでは学校にも行けない子どもたちが多くいる。世界を知ることによって何か私たちにできることを始めてみないかと投げかけた後、次回のネパールでの研修報告の告知を行った。

生徒の感想

- ・私たちはこの日本で、毎日当たり前のように生きているが、世界には毎日生きることが精一杯の人たちがたくさんいる。どうしてこんな状態になってしまったのだろうと思った。私たちが生きている日本がすべてではないのだと実感した。
- ・今まで他の国の存在なんて考えてもみなかったけど、今日知って複雑な気持ちになった。何か他の国にしてあげたいと思った。
- ・日本は裕福だ。ガソリン税が上がっても食料価格が上がってもそれで車に乗ることをやめる人もいないし、食べることをやめる人もいない。路頭に迷う人がたくさん出るわけもない。アフリカなどでは、1日1ドル以下で生活している人がほとんど。日本人は贅沢だと思う。
- ・私の悩みは日本ならではの贅沢な悩みな感じがした。
- ・実際にゲーム内で字が読めない側だったのでネパールの知らない文字が出てきたとき不安になった。
- ・日本はまだまだ平和ボケしている。日本人は自分のことしか考えてない人が多い。もっと世界に目を向けて欲しい。
- ・どうして貧困はなくなるのだろうか。どうしたらなくなるのだろうか。日本にできることはなんだろうか。
- ・自分たちには当たり前のことが・・・と思うとすごく考えさせられた。でも、自分にできることは勉強をがんばることくらいしかできない。
- ・現実の世界は人口も土地も広いから、国境を超えて分け合うことはとても困難で難しいことなんだと思う。

〈所感〉

私がこのアクティビティーに出会ったのは4年前のJICA中国主催「高校生国際協力体験プログラム」においてである。その時に覚えた衝撃を子どもたちにも体験してもらいたくてこの「68人村」を行うことにした。2クラス合同で行ったがクラス間に温度差があったように思われる。アイスブレイキングを少し取り入れてみてもよかったと反省した。

松尾さんが項目ごとに青年海外協力隊員としての体験を基にした見聞をお話ししてくださるので、最初はゲーム感覚で参加していた子どももしっかりと現実の世界のこととして受け止めていたようだ。テキストだけの国際理解教育の講座では味わえない、実体験を通した取り組みで子どもたちからも「分かりやすかった」と好評であった。以降の授業を行い振り返るとき、この授業におけるインパクトが一番あり、子どもたち自身も考えるところが多かったように思う。この授業での振り返りシートをもっと工夫して、最後の子どもたち自身の実践につなげられたら良かったと反省した。

事前の準備は大変であったが、子どもたちの内側にしっかりと響いたことは収穫であった。

3時限目 ナマステ!ネパール!

視聴覚室でパワーポイントを用いて行った。

事前に行っていたアンケート(「ネパールについて知っているか」など)の結果を示し、ネパールについての大きな情報を共有した。また、研修報告として、ネパールに行った理由や事前研修の様子、学校の様子など写真を見せながら説明していった。

4時限目 もっと知ろう!ネパール!

視聴覚室でパワーポイントを用いて行った。

この時間は、「教育」、「衣」、「食」、「住」に焦点を絞り、前時よりもさらに詳しい説明をした。

生徒の感想

- ・ 今日初めてネパールの政治の情勢や教育・生活などについて知った。たくさん日本人が教育などいろんな分野で支援していることを全然知らず驚いた。
- ・ 想像していた以上で本当にびっくりした。断崖絶壁にある通学路も見ているだけですごく怖かった。
- ・ 日本人はこんなに豊かな暮らしを自分たちだけでやっていていいのかなあと考えた。
- ・ 世界にも、ネパールの中でも格差があることを改めて実感した。ネパールに行ってみたい。
- ・ 子どもたちの欲しいと言った「石鹸」や「爪切り」は私たちには当たり前のものだと思っていたのでショックだった。
- ・ 支援をすることも大切だけど、ネパールの人たちがそれに頼りきらないように彼らが自立できるようになる支援が大切だと思った。
- ・ 私たちにとって安全で当たり前だと思っている学校があんなに危険な場所にあり、そして危険と分かっているにもかかわらず熱心に勉強をする子どもたちがすごいと思った。
- ・ 子どもたちの笑顔がとても輝いていた。
- ・ 貧しくても整備が整ってなくても、向こうの子どもたちにはちゃんと夢があって前向きに生きているというのを教えられて、改めて今の日本に絶望した。
- ・ TVや遊びよりも勉強が好きということに「スゴイ!!」としか言えなかった。



生徒の感想

- ・ 支援をしている日本人の中に、高知県人もいて自分に近いような人も世界で活躍しているんだなと思った。あこがれる！
- ・ 格差が激しい中で子どもたちがいろんなことを学ぼうとしているのに、自分たちは……。捨てるべきではないものを捨てていっている気がする。
- ・ ネパールの人々はとても暖かく、花を持って迎えてくれるやさしいネパールも知った。
- ・ トイレで手を使って拭くことは衝撃的だった。
- ・ 食べ物が美味しそう。
- ・ 人々の神への信仰の厚さに驚いた。
- ・ カースト制度は歴史で習って知っていたけど実際にまだ存在していることに驚いた。
- ・ 遺体の火葬が印象に残っている。人生の終わりまで身分の差で分けられていて驚いた。
- ・ 結局今できることは生きることだと思った。誰かの為に、自分の為に周りを巻き込み生きるべきだと思った。
- ・ ご飯を食べるのに手を使うのは嫌と思った。ネパールでは当たり前のことが私たちにはできんけど、私たちの当たり前の生活をネパールの人たちはできない。

〈所感〉

生徒の感想文を読んでいて、自分の語ることが生徒のネパールの印象の大部分を占めてしまうことに改めて責任を感じた。生徒の意見の多くがネパールに対するマイナスイメージであったのは、私がそのようなネパールの負の部分強調してしまったためではないかと反省をした。私は決してネパールが嫌いではない。永住はしたいとは思わないが、大切なかけがえのない地である。しかし、その思いやネパールの明るくおおらかな人々の気質を十分に伝え切れなかった感否めない。被支援国と支援国というスタンスで杓子定規になり過ぎていたのではないだろうか。せっかく人と人とのふれあいをして来たのに、それを十分に伝え切れなかったのが残念である。

5・6時限目 貿易ゲームで世界を体感しよう！

5時限目に貿易ゲームを行った。さまざまな仕掛けを取り入れることでできるだけ活発に貿易が行われるように工夫をした。

6時限目に順位発表や、このゲームの意図するところを解説した。また「さまざまな国と関わる中で、日本が今後どのような取り組みをしていくべき」だと、ゲームを通して考えたかなどを話し合わせ、ワークシートに記入をさせた。また、マーケットの役割をしてくれた松尾さんや本校教員、高知大学生3人に講評をしてもらったり、現在大学で行っているサークルの国際協力活動紹介を話してもらったりした。高知大学生の話は年齢も近いこともあり、親しみやすく、国際協力活動がより身近なものであることを知る手立てとして有効だった。



生徒の感想

- ・ 開発途上国の人ほど優しく、先進国の人ほど不親切だ。
- ・ (先進国に属していた生徒)後で言われてみれば、金を持っていない国に私たちは厳しかったかも。
- ・ 周りの国の状況をあまり理解できていなかった。分かっていたら取引についてももう少し考えることができたかもしれない。

生徒の感想

- ・理不尽さが心に残った。
- ・開発途上国と先進国との格差を改めて感じた。
- ・資源とお金と技術のバランスは難しいと思ったけど、すべての国が協力して思いやりの心を持てば解決できると思う。
- ・頭を使って自分が持っているものを上手に利用すべきだと思った。節約をして他国に還元すべき。
- ・私たちのグループは、資源はあるのに技術がなくて他の国に協力を頼んでも協力してもらえなかった。実際に国と国との間でもこんなことが起きていると思うと、すごく大変なことなんだと実感しました。
- ・どのようにして食品偽装や裏工作などの現象が起こってしまうのかという現実が垣間見えた。
- ・次回は開発途上国として参加したい。両方を体験したらもっといろいろなことが分かったと思った。

〈所感〉

実施時期が国公立大学の推薦入学試験直前で、クラスの核となる子が消極的になってしまったことは非常に痛手であった。また班分けももう少し子どもの性格的なこと(「すぐにあきらめてしまう」、「競争心が強い」など)を考慮して行うべきであった。1クラスは既に現代社会の授業で一度行ったことがあり、もう一つのクラスは今回が初めてであった。2度目の子どもたちの班は、袋の中身を見た瞬間に自分のおかれている国の立場を判断し、早々と戦意喪失してしまうところも見られた。結果的にゲームに集中し切れていない班があり、世界の格差を知って考えるところまでは全員が達成できなかったように思われる。また準備品や相場の設定など不十分なことが多く、スムーズな展開が難しかった。

この貿易ゲームはもっといろいろな要素を取り入れて考えることのできるアレンジ自在の教材であることが分かったので、今後も積極的に活用していきたい。私自身、初の貿易ゲームであったが非常に考えさせられることが多い教材であった。

7・8時限目 わたしたちにできること

2時間を通して高知大学国際協力団体すきっぷの松本健一さんとJICA国際協力推進員(高知県)の松尾さんに体験談の発表を依頼した。

両氏ともパワーポイントを使って各々の活動を分かりやすく説明してくださった。子どもたちにはワークシートを構え、聞きながらメモを取らせた。発表後は「世界の笑顔のためにどんなことが必要だと思うか」などを考えさせ、ワークシートに記入をさせた。



生徒の感想

- ・私たちはやれることが限られているから、夢のようなことをすらすら語ってもしようがない。ただ一度きりの援助は相手国側からしてみれば金持ちの道楽みたいなものと思われそう。気まぐれのような1回きりの大きな援助より、地道に支えあっていくことが大切なんだと思った。
- ・相手のことを考え、今何を望んでいるのかを理解し、援助していくことが大切だと思う。
- ・日本にいても国際協力はできることを知った。現実的な目標を立てて続けることが大事と言っていたけど本当にそうだった。
- ・たくさんの人のお話を聴いたり本などを通じて多くの情報を知ったりして、今の状況を把握していきたい。
- ・私たちも何かしたい！

〈所感〉

ここでもやはり私たちの発する言葉が子どもたちに大きく影響することを思い知った。お二人の話をしっかり聞いて世界について考えることができたようだ。私たちが世界の人々が笑顔であるために何ができるかという問いには多くの子どもが募金と答えた。これは松尾さんのお話の中にあった「日本はお金を持っているのに資金援助額は低い」ということに影響を受けたようだ。

また同時期に某番組でオークションによって得たお金でカンボジアに学校を建てるという企画番組の放映があったため、資金で何かをしたいと考えた生徒も多くいたようだ。他にはフェアトレードといった意見も見られた。何かをしようと思えばできる力が自分たちにはあることを認識してもらえたことは収穫であり、実際に何かをし始めたいということばが見られたことも非常に嬉しかった。

しかし、実際に3年生が活動に取り掛かるには残りの月日が短すぎる。もう少し早くに実践授業を開始し、余裕を持った実践にまで結び付けられたら良かったと反省している。子ども達の何かしたいという気持ちを無駄にしないように尽力したいと考えている。

成果と課題

成果

世界の現状を理解しようと生徒自身が努められたこと、何かをしたいという気持ちが芽生えたことは大きな成果であった。また、教職員対象の校内研修も行い、先生方にもネパールの様子を伝えられ、国際協力について考えていただくことができた。私自身もJICA国際協力推進員(高知県)の松尾さんや対象クラスのホーム主任の先生方と協力してより充実した実践授業を行う努力ができたと考える。実践授業を通して、一人ではできないけれど、周りを巻き込んでプラスのパワーを子どもたちに還元できたのではないと思う。

課題

帰国後の情報の取りまとめや、パワーポイントなどの教材化が遅れたため、開始時期が遅くなってしまった。対象学年が高校3年生であることを考慮し、もう少し早く取り掛かるべきであった。また、生徒間の意見交流を積極的に行う場面を持てなかったため、一人ひとりに芽生えた国際協力をしたいという気持ちがクラス全体に流れていることを具体的に実感できる場がなかった。当初の予定では、具体的に国際協力の実践をするところまでは行く予定であったが、学校行事の変更などもあり、十分に時間をとることができなかった。今後はこの経験を活かし、見通しを十分に立て、余裕を持った体験型授業を行って持続的に啓発活動ができればと考えている。

最後にこの研修に際し、数え切れない方々のご支援とご協力で貴重な体験をさせていただき、また実践をすることができたことに感謝の意を表します。



参考資料

【書籍】

- ・野津浩仁(2002)「旅の指さし会話帳25ネパール」情報センター出版社
- ・地球の歩き方編集室(2007)「地球の歩き方 ネパール 2007・2008」ダイヤモンド・ビッグ社
- ・開発教育協会制作(2006)「新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」開発教育協会
- ・開発教育協会・神奈川県国際交流協会 制作(2006)「新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える～改訂版」開発教育協会・神奈川県国際交流協会

・研修中配布資料

【インターネット】

- ・外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/index.html>
- ・JICAホームページ <http://www.jica.go.jp/>



ネパールについて知る・国際協力について・異文化理解について

徳島県立城西高等学校

担当教科：英語

香川 敬子

◆実践教科：異文化理解

◆時間数：11時間

◆対象学年：高校3年生

◆対象人数：12名

カリキュラム

◆実践の目的

1. ネパールの文化や習慣に親しむことによって広く世界に目を向けさせ、異文化に対する理解を深めさせる。
2. ネパールと日本の教育制度についての類似点、相違点を知り、「学ぶ」ことの意義について考えさせる。
3. ネパールの食生活や食文化について知ることによって日本の食生活と比較させる。
4. 世界の現状を知ることによって自分の生き方を見直し、自分たちに何ができるか考えさせる。
5. ネパールで行われていた支援について具体的な事例を交えて話すことによって支援について知るとともに、現地の人が支援をどう捉えているかや支援の意義について考えさせる。

ココがすばらしい！

「海」を見たことのない子どもにどのように「海」を紹介するかというアイデアから授業を展開。これにより、自分達には当たり前のことも、他の人にとっては当たり前ではないかもしれないという発見に繋がった。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールを知る 導入のためネパールを知り興味を持たせること	・ネパールの学校の様子について ・ネパールの教育について	・写真 ・ネパールの教科書 ・収集した写真 ・絵はがき ・新聞
2	ネパールの食文化について ネパールの食生活について知ることによって自分たちとの食生活の違いを探索	・ネパールの食事について ネパールのスナック菓子やクッキーの試食	・写真 ・ネパールより持ち帰ったスナック菓子、クッキー
3 ・ 4	ネパールと日本の類似点と相違点について 異文化理解	・10日間の研修について ネパール滞在について足跡をたどり感想を話す	・スライド (パワーポイント) ・ワークシート ・クルタ
5 ・ 6	ネパールの生徒へ手紙を送ろう 海を知らない子供たちがいるという現実を知る。どのように海について説明すればよいか考えさせる。	・パソコンを用いて1人1枚工夫を凝らして手紙を書く	・自己紹介文の書き方の説明(ALTによる)
7 ・ 8	食糧問題について 世界の現状がどうか考えさせる。	・個々に考えたあと、6グループに分かれて違った視点から考えてみる	・本
9 ・ 11	佐野由美さんのビデオを視聴して 佐野さんの生き方を通して異文化理解や国際協力について考えさせる。	・ビデオを視聴し個々で考える ・グループに分かれて話し合う	・ビデオ ・ワークシート ・ビンディ ・プレスレット ・クルタ

1 時限目 | ネパールを知る

〈実践・所感〉

生徒も興味深く話を聞いていた。持ち帰った英語の教科書が役に立った。日本の教科書と比べていくつかの違いがあるということ(カラーページはない、紙質が悪い、印刷状態は良くない)や教科書の厚さにも驚いていた。ネパールの英語教育の簡単な歴史やネパールでは英語がどのような位置を占めているか(1番人気のある外国語は英語、2番目が日本語)についても話した。英語教育は日本よりも進んでいるという事実を実感し、私自身の取り組みを見直すきっかけとなった。英語以外の教科書は図書室に置いたため、多くの生徒が手軽に手にとって見る事ができた。本校職員にも見せたが理科、数学の教科書も日本のものよりレベルが高いということであった。



ネパールの教科書を見る生徒



図書室でネパールの教科書を展示

2 時限目 | ネパールの食文化について

〈実践・所感〉

ネパールの食文化を説明したあと、持ち帰ったスナック菓子やクッキーを試食した。ネパールのホストファミリーに買い物に連れて行ってもらい勧めてくれたものを買って持ち帰った。日本のスナック菓子とはにおい、味、素材が異なっているため、おそろおそろ口にするという感じであった。おいしいという生徒もいれば、そうでないという生徒もいて反応は様々だった。日本はやはり飽食国であると感じた。クッキーも日本では馴染みのないのスパイスが使われており、どう反応するか心配したが、数名の生徒は非常においしいと言い、パッケージの写真撮影まで行うほどであった。



ネパールの食事の様子

13・4時限目 ネパールと日本の類似点と相違点について

〈実践・所感〉

ネパールでの足跡をたどる意味で、研修をスライドにまとめた。写真の数も多く1枚1枚パソコンで見せるにはロスが多いと感じたためである。スライドを見ながらワークシートに気づいたことを記入させた。生徒が事前に制作したカードをネパールの生徒に渡したときの反応などについても話した。



スライドを用いての授業



使用スライドの1部

ワークシート

1 挨拶		
2 ネパールの概要		
3 日本とネパールの違い	ネパール	日本
4 感想		

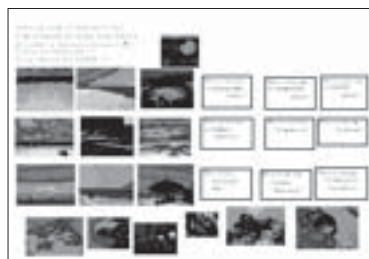
15・6時限目 ネパールの生徒へ手紙を送ろう

〈実践・所感〉

この世の中に「海」を知らない子供がいるということに生徒は衝撃を受けたようである。四国に住んでいる我々にとっては生まれたときから海は身近なものであるが内陸国であると共に情報網もさほど発達していないネパールの山間部では海は想像をふくらませて考えるしかなく、それには限界もある。我々には当たり前のものが相手にとってはそうでないということは、文化を理解する上で常に考えておかなければならないことである。生徒はそれぞれが工夫を凝らしてインターネットを駆使して写真入りの海の説明文を作成した。



海を知らない子供たちへの手紙

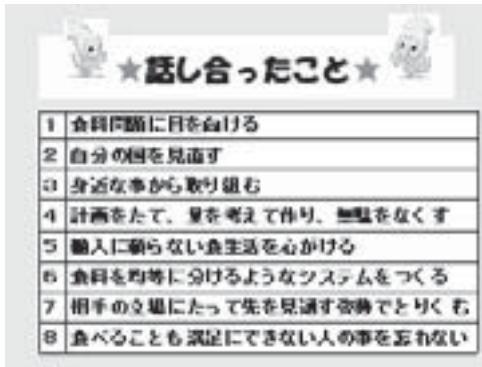


海を知らない子供たちへの手紙

17・8時限目 食糧問題について

〈実践・所感〉

世界の食糧問題について考えさせる。新興国の光と陰の部分、食生活の変化、先進国の食生活の問題点、新興国の言い分、先進国の言い分、食料高騰の原因、自分たちに何ができるか、などについてインターネットや書籍を通して考えさせた。それらをまとめて、パワーポイントのスライドを作成させたり、模造紙にもまとめさせ、徳島県国際教育振興弁論大会のグループの部に出場した。その後、模造紙を本校の文化祭、収穫祭で展示し、来校者に見ていただいた。



★話し合ったこと★	
1	食料問題に目を向ける
2	自分の国を見直す
3	身近な事から取り組む
4	計画を立て、星を考えて作り、無駄をなくす
5	輸入に頼らない食生活を心がける
6	食料を均等に分けるようなシステムをつくる
7	相手の立場にたって先を見通す姿勢でとらえる
8	食べることも満足にできない人の事を忘れない

使用スライドの1部



模造紙の展示



〈所感〉

食糧問題は世間を賑わしており、生徒の関心も高い問題である。本校は総合学科と農業科学科から成り、食に対する関心も強いいため熱心に調べ学習に取り組めた。出場に当たっては、初め気乗りのしない者もいたが、最後には、出場するからには全員が一致団結して頑張ろうというところまで気持ちが高まっていた。取り上げた国はインドとアメリカであるが、考え方の根底に置くべきものは国がネパールに変わっても同じであると思う。

19~11時限目 佐野由美さんのビデオを視聴して

〈実践・所感〉

佐野由美さんのビデオ「With若き女性美術作家の生涯」を最初の2時間で視聴する。ビデオを見ながら登場人物、印象に残った言葉を記録させ、感想は残った時間で仕上げさせた。その後、前期中間テストがあったため佐野由美さんのビデオについての問いを出題し解答させておいた。

11時間目にその解答用紙を元にグループで話し合いをしたあと発表をさせた。1グループ3人でそれぞれが司会、記録、発表を分担した。希望で次のaからdまでのどれか1つを選ばせて話し合わせた。時間の都合上それぞれ5つ程度に絞って解答を出すように指示した。



生徒のまとめた意見は次のものである。

a 佐野さんの活動・取り組みはどんなものがありましたか。

- ・ネパールの学校で生徒たちに美術を教えていた
- ・言葉と技術だけではなく国境の壁も人の思いは超えられると思った
- ・震災を通して自分が他人に何ができるかに気づいた
- ・佐野さんの生涯は短かったけどみんなの中で佐野さんは生き続けていると思った
- ・言葉だけでは通じないことも絵を通してなら人と心が通じ合えると感じた

b 異文化理解について（相手の文化を尊重したり、なじむにはどうすれば良いでしょうか。）

- ・いつも笑顔で心がける
- ・言葉が分からなくても絵を描くなどコミュニケーションをとる
- ・自分から相手へ話しかけていく
- ・自分の国のことをいっぱい知ってもらう
- ・相手の国の文化を調べ実行してみる

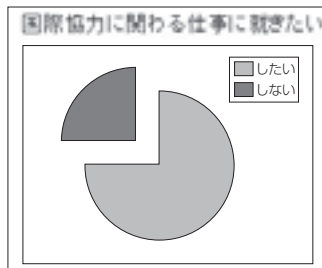
c どのような方法で言語を習得すればよいでしょうか。

- ・実際にその場所に住み最低2ヶ月はいること
- ・ジェスチャーなどで少しずつ会話を理解していく
- ・いろんな人と積極的に話そうとすること
- ・絵などを描いて伝える
- ・まずはジェスチャーなどで伝えることを学ぶこと
- ・自分が得意なことやものを通じて
- ・自分で独学でも学ぶこと
- ・現地の彼氏をつくる
- ・毎日ちょっとした会話でも続けていく

d 国際協力については、どのような姿勢が求められますか。

- ・国際協力をしてやっていると思わないこと
- ・自分の意志を強く持つ
- ・まず自分のことをよく知ってから他国に
- ・文化や習慣を理解し受け入れる
- ・目を背けない
- ・後の国際協力が続けやすいようにする

発表させたあと、作成したパワーポイントのスライドを用いて、異文化理解、国際協力、支援のあり方についてまとめた話をした。お土産のビンディ、プレスレットも配布した。



異文化理解選択生徒(12名)の意見

〈所感〉

生徒はビデオを熱心に視聴し、佐野由美さんの生き方に感銘を受けたようである。中間テストを挟んだが、テストでビデオに関する問題を出題していたため話し合いはスムーズに行われた。こちらの予想以上の意見も出た。話し合いをさせて良い意見が集約できたと思う。

参考資料

【書籍】

- ・池田香代子、マガジンハウス（2004）「世界がもし100人の村だったら3（たべもの編）」マガジンハウス
- ・ジェシカ・ウィリアムズ著（2005）「世界を見る目が変わる50の真実」草思社
- ・日本国際飢餓対策機構編（2003）「まんがで学ぶ開発教育 世界と地球の困った現実～飢餓・貧困・環境破壊～」明石書店
- ・（社）日本ネパール協会編（2000）「ネパールを知るための60章」明石書店
- ・社団法人 農山漁村文化協会（1995）「ネパール家庭料理入門」（社）農山漁村文化協会
- ・宇田和子（2004）「私のネパール菓子」安居洋一
- ・蔵前 仁一編、小川 京子「季刊旅行人2007春号 Spring No.155」旅行人